



始



特 110
520



八
重

俠
艷
情
話
集
(
第
三
編
)

花
袋

春
陽
堂
出
版

大
正
6. 8. 30
內
交



お
八
重

押し詰つてひどく風邪を引いたため、これでは元日はお座敷に出られないかと心配したが、幸ひに熱が除れて、まだ気分はわるいけれども、兎に角多いお約束の座敷を賑やかに廻ることが出来た。

2 今年は株や相場が好いので、正月の景気は大したものだった。お八重は朝の十時から夜の十二時過ぎまでに、お座敷を十二ほどした。賑やかな春の気分、潰し島田に白襟紋附、出の裾模様の見事なのと帯の金ピカとを誰も誇りけに見せ附けて、「おめでたう、おめでたう」などと互に挨拶した。何處の料理屋の女將も、機嫌がよく、「さうともね、春だからね。精々お捗せぎよ」かう言つて、二十分か三

3 十分しかるないお座敷でもすぐ明けて呉れた。夜遅く、家に歸つて来る時分には、いくらか飲んだ酒もさめ、張り詰めた氣も弛んで、「只今」と言つて格子を明けて入るとそのまゝ、晴衣のまゝでべつたりと長火鉢の前に坐つた。

「風邪は何うだえ、お前」

かう心配して、母親が寄つて来ると、

「頭が割れるやうよ」

お八重は肱を長火鉢の縁に立て、右の手を額に當てた。長襦袢の袖の赤く白のが腕からこぼれた。

「大事にしないと、いけないよ」

「ええ」

軽い咳嗽を一つ二つしたが、手を額から離して、「でも、十二した。藝者も今日のやうに忙しいと、面白いね」かう言つて、帯の間から祝儀を出した。

「十二？姐さん？」

去年嫁いて、懐妊して、それを産むために遠くから歸つて來てゐる妹のお孝は、かう言つて、矢張そこに寄つて來て、機嫌を取るやうに姉の顔を見た。

「大變出來たね」母親も莞爾しなから、祝儀を受取つて藏つたり何かしてゐるが、

「お前、お中は？」

「もう、好いの……」

「ぢや、お茶でも淹れやうか。さつき、切山椒を買つたから」

かう言つて、母親はお八重の坐つてゐる長火鉢に相對して坐つた。

室には正月らしい氣分が一杯に漲つてゐた。雁次郎の忠兵衛、梅幸のお富、其他いろいろの役者の羽子板が五六枚並べてかけられてあるのが夜目にもそれと鮮かに見えた。床の中央には、大入と書いたピラ屋からの赤い白い小さな額、此方の壁には、正月の約束の細長い紙札が、何日は何處、何日の何時からは何處と言

ふ風に書いて下けてあつて、それに十燭の電燈が明るく照つた。

「婆や、寢たの？もう」

「遅いからね」

それをお八重が聞かされて、「遅いたつて、主人が歸つて來ないのに、寢るツて云ふことがあるもんかね。母さんがわりいんだよ。だから、我儘になるんだよ。」
「でも、今日は疲れたらうからね、婆やも……。婆やは起きてるやうと言ふのを、さう言つて私が寢かせたんだよ。」

お八重は黙つた。

お八重の頭には、體には、去年の暮から、否、去年七月にわかれてから以來の男に對する煩悶が、今でもをりをり首を擡げて來てゐた。今日のお座敷でも、それとなしに、朋輩の妓達からその事をほめかされた。此方が黙つて眞面目な顔をしてゐるので、——その事には成るだけ觸れないやうに無關係のやうにしてゐるの

で、妓達も正面からは切り出さないけれども、場所が何うの、總見が何うの、A 關が來てるのと言つた。「何うしたのさ、八重ちゃん、いやに今年は眞面目ね」こんな風な顔の表情をするものもあつた。Bは歸つてゐるらしかつた。部屋にゐるらしかつた。よくはわからないけれど、矢張困つてゐるらしかつた。

ひとり手に溜息が出た。

「寢衣が暖つてるの？」

かうお八重が言ふと

「え、……お着更へなさいますか」其處に坐つてゐた、もう來々月が臨月といふ大きなお腹をした妹が立ちかけた。

「私がするから好いわ」

お八重は立上つて、半分床の引いてある八疊の方へ行つて、スルスルと金ピカの浮織の帯を解いた。緋の下、白と茶の縞の博多の伊達巻、梅と水との模様

くつきりと出てゐる出の衣裳、それがサツと脱かれたと思ふと、下には年にしては派手すぎる紅の多い長襦袢、それをもぬくと、白い腕に赤いメリサヤの半ウソツキ、下にも同じ暖かさうな赤いメリヤスの丸腰巻が見えた。

「お、寒い、寒い」

といふ間もあらせず、妹のお孝は、其處に行火にかけてあつた銘仙のドテラをふわりと後からかけた。と、今度は反對に「おう、暖かい」かう言つて、お八重は、その上に、もう一枚縮緬のどてらを引かけて、再び長火鉢の前に來て坐つた。茶が淹れられたり、菓子が出されたり、いろいろの話が続いて出たりした。お八重は後の戸棚から焼鹽の小燧を母親に取つて貰つて、あつく鹽湯を一杯茶碗につくつて貰つたりした。春のお座敷の景氣の好いことがそれからそれへと話された。妹のお腹の兒の動く話なども出た。

「お父さん、よく寝るのね。大きな餅ねえ」

などとお八重は言つた。

二

枕を着けてから一二時間、如何な時でもその時間は、お八重は男のことを思はないことはなかつた。もうお八重は三四年來その空想やら煩悶やらにさいなまれた。時には辛く、時には悲しく、時には楽しいのがその空想やら煩悶やらであつた。逢つたその年に、夫婦約束をして、口ではいけないからと言つて起證まで取換して置きながら、今日になつてもそれは何うにもならなかつた。深川の不動に行つて、あれほどちかつて、もう再び花札を手にしないとまで言つた賭博を、Bはまだやるらしかつた。旅に出てばかりではなく、此方にも浮氣の相手は二三人はあるらしく、元のTの女將とは、それでもすつかり切れたらしいけれど、その

他にもY町に一人、K町に二三人はあるらしかつた。

七月に旅に立つ時、旅費から着類から一切自分で都合してやつて、朝鮮に渡つたら、屹度都合して金を送る筈であつた。京城から、群山から、海洲灣から……「今度實行しなけりや、私の方にも考へがあるから」と堅く約束した。しかし、矢張梨の礫で、何處からも金を送つてよこさなかつた。否、そればかりでなかつた。始の一ニヶ所からは着いたとか無事だとか簡単な手紙だけはよこしたが、後には手紙さへも碌々よこさなくなつた。

お八重は轉輾反側した。夏の中は、毎日二階に上つて寝たが、をりをりは自分で自分がわからない位に、又は自分の運命が何うなつて行くのかわからない位に、いろいろと深く思ひ詰めた。絶えず男の夢からお八重は覺めた。そして朝、目が覺めて起きて来て見ると。男が旅に出る前に、土を買つて来て、せつせと拵へて行つて呉れた小さな花園、そこには矢張赤い白い紫のダリアが咲き、一緒に並ん

で覗いた金魚の鉢には、矢張尾の長い金魚が泳ぎ、南洋の小さい龜の子は石の上
 に上つて甲羅を干して居るけれど、生活は矢張依然として元の通りで、髪を結つた
 り、湯に入つたり、お座敷に行つたり、心にもないお世辭を振時いたりしなけれ
 ばならなかつた。お八重はもう二十八だ。子供時分から藝を磨いたのならば、こ
 のまゝ、好い立派な姐さんになるといふ希望も起つて來ないでもあるまいけれど、
 中途で藝者になつた身では、とても土地での誰々と指されるやうな老妓になる
 ことは、並一通りでは出來なかつた。何うなつて行く身だらう。それは、旦那は
 一通りには世話はして呉れる。しかし立派な細君があり子供がある人に、いつま
 で自分は安心して身をまかせて居ることが出来るであらうか、それに、妹を嫁
 けてから、一層お八重は懊惱した。二人達の仲の好い手紙などを見せられると、
 お八重は神經性にくわつとして、「何うして、かう自分ばかり不都合なのだらう」
 と思つた。自分で取る月給を少ししか出さない父親、自分のことを心配はして呉

れても何うにもする力を持つて居ない母親、弟はあつてもまだ海のものとも山の
 ものともつかない身の上、さう思ふと、幼い頃から田舎に行つたり、A町に出た
 りして、一家のために犠牲になつた身がつくつく悲しくなつた。
 しかし、今度こそはしつかりとして居よう。さうした欺騙は、虚偽は、もう何
 遍となく味つた。ありもしない金を使つたともちつとやそつとではない。そのた
 め着物や櫛や指環も質に入れて、今だにそれがたゞつて居る。母親はそれ見たこ
 とかといふ顔をして居る。今度こそは……今度こそは……きつぱりやめる……。
 矢張、去年の春もこれと同じであつた。やめるつもりであつた。しつかりし
 て居るつもりであつた。それが、男の情にほだされたのと、此方にも男戀しやの
 心に燃えて居たのとで、つい出来るともなくまたもとの状態になつた。その爲め
 土地にも世間にも浮名を流した。義理ある旦那にも、此方から欺騙と、薄情を敢
 てしたといふわけではなかつたが、他目にはさうとしか見えないやうな形になつ

た。

お八重は夏の末頃から、辛い悲しい思を振切つて、今度こそは別れる、やめ、向ふだつて、約束を實行しないで、旅から歸つて來たつて、すぐ家にもやつて來られないだらう。やつて來たつてこととはる。かう何うやら彼うやら決心をきめて、Bが大阪に來て、「キモノスクオクレ」といふ電報をよこした時にも、自分は東京にゐないやうにつくつて、その時新瀉にゐた弟に頼んで、そつちから、愛憎づかに近いやうな手紙を、Bにはなしに、Bの弟子のAに宛てて出した。そして東京からは、母親の名で、「カネオクレキモノスクオクル」といふ電報を打つた。暫くしてから、着物が是非入用だと見えて、男から金をいくらか送つて來た。で、母親の名で着物を送つた。

その男の着物といふのは、七月に立つ時にお八重の冬物を質に入れて旅費をつくつてやつて、すぐその金は返す筈であつたのを、送つてよこさないで、冬物が

必用になつた時に、代りに質に入れたのであつた。

一昨年あたりは、場所でのBの成績は、かなりによく、一時は三役まで入つたことがあつたが、それから引續いて黒星勝で、昨年の春は殊にわるかつた。五月はそれでも半々に行つたが、元氣がなくなつてゐるのはお八重にもわかつた。「いやな稼業だ、もうやめだ」かうBは度々言つた。

それが、去年の暮から、今年になつて、新しい番附が出たのを見ると、男はグツと下つて、今度出れば、いやでも幕下に落ちなければならぬやうになつてゐた。幕下に下れば、例の千五百圓の養老金も取ることが出来なかつた。つゞいてBは春場所には休業するといふ噂を耳にした。

この養老金の千五百圓、これも度々お八重と男の間に出た。それで、藝者の二人か三人も置いて……。旦那は話せばよくわかる人なのだから……。不斷からさう言つてゐるのだから……。こんな風に話したことも一度や二度ではなかつた。しか

し、それが當てにならないのをお八重は既に餘りに度々經驗させられた。
男は確かに去年の暮に部屋に歸つてゐた。しかしそれに就いては、お八重は母親にも誰にも一言も言はなかつた。お八重は黙つて、昂奮したやうな顔をして、忙しい正月のお座敷へと出かけて行つた。

三

一月二十日の夜だ。

遅くお座敷から歸つて來ると、母親の顔がいつもになく昂奮してゐる。イヤに捜すやうに人の顔を見る。

「何うかしたの？」

14 「お前、知らない？」

「何を？」

じろじろと母親はお八重の顔を見て、「本當かえ、本當に知らないのかえ」「何をさ？」

「もう、少しさつき、Mのおやぢか來たよ」

「さう？」

お八重は胸の躍るのを禁め得なかつた。

「本當に、お前知らないのかえ。知らをきつてゐるんぢやないかえ」

「だつて、今までSのお座敷にゐたんだもの。母さん、すぐあゝだから……。疑ぐるなら、誰にでもきいて御覽なさいな。Mさんと一緒にゐたんだから……」
母親は考へるやうにして、暫し黙つてゐるが、「此間、場所へなんか行くからわるいんだ。やめる氣なら、寄らずさはらずに放つて置けば好いんだ。出かけて行くからだよ」

「だって、あれは、此處の總見ですもの……。行かないわけに行かないぢやないの」

母親は再び黙つた。

「何うしたの？それで？」

「來てるらしいよ」

「何處に？」

母親はあこでしやくつて見せて、「あそこだらう。Mのおやぢの來る前に、あそこの女中も來たさうだよ。私はお湯に行つて留守だつたけれど、婆やに、姐さんがゐらつしやるならつて言つてきたさうだよ」

「婆や！」

老婢は呼ばれて出て來た。「いゝえ、別に、誰つて言ふことも言はないんですけども……。」

姐さんにちよつとお目にかゝりたいつてね。お座敷だつて言つたら、

16 いつ頃歸るでせうつて言つて、何處のお座敷だかきいて行きました—

「Mは何つて言つたの？」

「別に、これつて言ふことはないけどもね、矢張姐さんがゐるなら、ちよつとで好いから來て下さいつて言つて來たんだよ、來てるらしいよ。」

「さう」

考へて、「來たつて、しやうがないわ」

お八重の胸には、一昨年さくねんの暮くれに、矢張今と同じ状態じやうたいで、男をとこがちかに家うちにやつて來た時の光景くわうけいが浮うんだ。その時とき、丁度且那ちやうだんなが來てゐた。母親はやおやが立つて行つて、入口いりぐちの格子戸かうしを押おへて、上うへに上げまいとするのを、何なんの彼かのと言いつて入はいつて來た。その時ときもお八重おやちは別わかれるつもりであつた。それが今いままでも矢張やはりその時ときと同じ状態じやうたいでゐることをお八重おやちは考かんへた。

重八お
その時ときもさうであつたが、今いまも矢張心やはりこころの何處どこかでさうしてやつて來てゐる男をとこが可哀相かあいさうのやうな氣きがした。それから一方ひうでは、半年逢はんねんあはずにゐた戀こひしさも心の底こころのそこ

の底にあつた。

「だつて、仕方がない。そんなことをいつまでもしてゐては、私の身が詰まるばかりだから」

「本當だとも……」

「でも、男ツて、そんなもんかね。散々自分で勝手なことをして置いて、ちつとも自分の方のことはして置かないで、それで平氣でそんなことを言つて來られるものかねえ」かうは言ふものゝ、四五日前、本場所の三日目かに、土地の總見とは言へ、それ以上に一種の期待と好奇心とを持つてお八重は出かけた。其處では、お八重はBのことは何もきかなかつたけれども、その弟子のAを呼んで貰つて、祝儀を二圓紙に包んでやつたりした。AはBに吩咐かつてではあるけれども旅の巡業先から常にいろいろなものを送つてよこした。その禮などをお八重は言つた。別に此方から訊きはしないけれども、Aは二三その師匠についての話をし

「此間行つた時、お前、誰れかに逢つたかえ？」

「關取衆？」

「あ」

「Sにも逢つたし、Uにも逢つた」

「だから來たんだよ。行かなけりやよかつたよ」

お八重は黙つてゐるが、やがて、

「來たツて構やしない。今度こそ別れるつもりなんだから」

「迎へに來たツて、お出でないよ。話があれば、向ふから來れば好い」

「さうともね」

それきり別に深い話もしなかつた。お八重は落附いた風で、或はわざと落附いた風を見せて、平氣で、茶だの、いつもする鹽湯などをつくつて貰つて飲んだ。

しかし、Bに對する母親の態度がお八重にある反感を起させた。「寢るよ、もう」かう言つて、寢巻を着て、お八重は二階に上つて行つた。

四

翌日になつても、別に變つたことはなかつた。お八重はいつものやうに九時頃に起きて、婆やの沸して置いた湯で、勝手元に坐つて、顔を洗つて、それから四疊半に行つて、長い間おつくりをした。

去年なら、すぐMあたりに飛び出して行くのであつたけれども、そんな様子もなく、おつくりが出来たあとでは、長火鉢のところに坐つて、毎日讀む例になつてゐる新聞のつゞき物を讀んだ。

しかし低氣壓は次第に色濃くなつて行つてゐるのを家の人々は誰も感じた。勿

論それは昨日今日からではなかつた。去年の暮、男が旅先から歸つて来た時分から、そろそろ崩し始めてゐた氣分であるが、毎年今頃になつて起つて来る氣分であるが、それが一週間ほど前、旦那がやつて来た頃から、次第に深く濃かになつて來てゐた。旦那の方にもある決然とした考のあるのがその口からほのめかされた。「いつまで同じことをしてゐたつて仕方がないからな。長い間、お前の世話を見て來てやつたが、さうさうは俺も見てやつてはゐられない。それに、俺がゐるために、お前と關取との仲が完全に出來上らないといふやうな形もある。眞面目に、眞劍に考へれば考へるほど不自然だ。俺にも今度は考へがある。かうきつぱりした調子で旦那は言つた。去年、一昨年は何と言つても、まださう氣分がつき詰めてゐなかつた。それに、旦那の方でもそれほど女に重きを置いてゐなかつた。しかし、今ではもつと氣分が突詰めた。お八重と男との關係も矢張さうであつた。一度よりは二度、二度よりは三度と言ふ風に、心から自分の身の上

のことを考へた。

その低気圧のために、母親も妹のお孝も、正月といふ月を、いつもわるいやな月だと思つた。平生はおとなしい姉がいやに人につまかゝつて来る。私ばかり人身御供に上つてゐるやうなものだと言つては泣く。私だつて女だからちやんとした亭主を一人持ちたいにはきまつてゐるなどといふ。さうかと思ふと、Bの來てゐる家に一日行きつきり、お座敷がかゝつて迎へに行つても歸つて來ない。妹のお孝も母親もそのため何んなに苦勞したかわからなかつた。いやな低気圧、實際いやな低気圧だ。「これさへないと好いんだけど……」かう母親とお孝とはいつも嘯き合つた。窓には黄い日影がさして、寒い寒い風が往來をふきまくつた。中でも母と妹に取つて忘れることの出來ないのは、去年の一月の十三日に、置手紙をしてお八重が家出をした。手紙には、申譯がないから、淵川にでも身を投けると書いてあつた。金は懇意な呉服屋から借りて行つた。「あのお袋が頑張つて

るやがる！今にひどい目に逢はせてやる！」かうその男が言つたが、果してお八重はBに伴れ出されたのであつた。それから十日ほど、家中はねる目も寝ないで、お八重の行衛をさがした。妹などは泣いてある處へ電話をかけた。やがて心配と苦惱との中に、お八重が再び姿を現はした時には、お八重は既に全く男の薬籠中のもになつてゐた。その時以來、母親はつとめて、娘のことには口を出さまいと決心した。

妹はその春結婚して遠くに行つた。

母親の持病の眼は、いつも其頃になると、わるくなるのであるが、今も矢張り同じやうにして、その低気圧の段々色濃くなつて來るのを身に體感しつゝ、長火鉢の前で、日の當つた窓を横にしながら、土鍋で暖めた薬につけた布を目に當ててゐた。妹は又妹で、唯その低気壓の來るのを見詰めるといふやうにして、又忍耐してその低気壓の來て通つて行くのを待つやうにして、終日長く裁縫の針を動

かしてゐた。

「お孝は本當に張合がありやしない。私なんかいくら世話をしてやつたツて、ちつとも私のことなんか思つて呉れやしないんだから……」

姉はこんなことを言つた。

しかし、母も妹も成るだけそれに觸れまいとするやうな態度を取つた。いくらほらはら思つたツて駄目だ。又、いくら常人のためになるやうに言つてやつたツて駄目だ。あらゆる千言萬語も、あらゆる涙も、それに對しては何の効もないと言ふことを母親も妹も既に既に度々経験した。だから、今度自分から切れると言ひ出して、又は新潟から愛想つかしの手紙を出すやうにする時にも、母親はつとめて無關心の態度を取つて、唯々それを眺めてゐるといふ位置に身を置いた。心から身の詰りと言ふことを考へたか、それとも此間來て旦那の言つて行つた言葉考へたか、それは何方だかわからないけれど、幸に、お八重の態度には、

別に男に引かれるといふやうなところもないやうに母親に見えた。勿論、焦立つた神経と昂奮した顔とは、その内部の潮流の穏かでないことは示してゐるが……。

「何うも、胸のこゝのところが痛くつてしやうがない。いつそ、肺病にでもなつて、てきばき死んで行つて了ふ方が好いかも知れない」

こんなことを言つてから、お八重は胸のところを押へてゐた。

見兼ねて、母親は、

「風邪かまだ治らないんだらう？」

「無理をしたからね」

「少し休んで見たら何うだね」

「でも、ね、正月だからね」

かう言つて、立つて日當りの好い縁側のところに行つて、のびた爪を切つて見たりした。

をりをり辛さうに溜息をついた。

さうかと思ふと、喪心したやうに、ほんやり何を見るでもなく、何を眺めるでもなく、庭に面してじつとしてゐた。

午後には、髪結の來てる中に、Sから口がかゝつて來た。「四時と、六時とお約束があるんですがね。それに間に合ひさへすれば伺ひますが……」かう言つて見番の男を歸したが、「それまではあきますから」と言つてやかてその男はやつて來た。で、受けて置いて、髪が出來るとそのまゝ手拭を持つて湯へ行つた。

昨夜は男は泊つたらうから、まだそこの待合にゐるに違ひない。かう思ふと、母親はお八重を湯に出してやるのも氣がりのやうな氣がした。しかしやがて歸つて來た娘には、別にそんな風な様子もなく、そのまゝ鏡臺に向つて、綺麗におつくりをして、着物をそろへて其處に出して貰つて、いつもの通りにして出かけて行つた。

五

無論お八重にはその低氣壓が誰よりも一番強く迫つて來てゐた。しかしかの女は、此處を辛抱しなければ、半年思ひ詰めに思ひ詰めた折角の決心も、一朝にして溶けて水の泡になつて了ふといふことを考へた。従つて車の上でも、その二つの考へが、凄しい火花を擧げて相戦つた。

Bの不眞面目と無責任に對する反抗はかなりに力が強かつたが、それよりも一層さうして女の許にやつて來てる男が可哀相だといふ考へ、ともするとお八重の體中に漲りわたつた。それに、男の身の落目、ぢき近所にもとY町の藝妓で今待合をしてゐるFといふ家の長火鉢に、男と同輩のA、これも成績がわるくつて來年は廢業するがAがちやんと納つて、Bのわる口を言つてゐると思ふと、そのためた

けでも、自分か何か盡してやらなければならぬと思つた。去年の暮、そのFの待合の女將と喧嘩して、かけてもよこさず、かけてよこしても行かないやうな間柄に今日なつてゐるのも、實はそのAといふ力士と自分のその男とのことから起つたことだけに、一層さういふ念が強かつた。しかし……しかし、今、自分から出て行つては、半年考へた細かい辛い空気が、決心が、すべて無駄になつて、もとにもとに逆もどりをするといふ考が、辛うじてお八重の態度を正しくさせた。

Sで一座敷、つゞいて午後四時のお約束、それがすんで、Iに廻ると、其處は新聞社連の大一座で、人数の割に藝者は少く、年齢順で、姐さん姐さんと若い妓達に立てられるので、お八重は目の廻るやうな忙しい思ひをした。それに、中には旦那と男とのことを知つてゐて、種々ひやかしたり何かするものなどもあつて、イヤな座敷であつた、その間に、IIから貰ひがかかつたが、そつちに行つてゐるやうなひまはなかつた。

でも十一時すぎには、何うやら彼うやら片附いて、歸らうと思つて、帳場で話しをしてゐると、其處へ家から使のものか来たといふことである。

何の川事だらう。家から使ひとは？電話が何處にだつてあるのに……。かう思つて出て見ると、婆やが其處に昂奮したやうな顔をして立つてゐる。

「何うしたの？」

「あの姐さん、お歸りになるんでせうが、一寸わけがあつて」と言つて、顔を傍に寄せて小聲で、「ですから、お上さんかお孝ちゃんか來るんですけども、ちよつと手が明けられませんし……それに、電話では世間にはつとしていけないからツて言ふんで、それで私が來たんですが……」

もう少し前に、Bが家に上り込んで、何うしてもお八重の歸るまでは動かぬと言つてゐるから、……歸ると、もしものことがあるとわるいから、Hなり、それともM屋のK姐さんなりに頼んで、今夜は泊つて來いといふことであつた。

「ひどい権幕？」

お八重は小聲で訊いた。

「何か、お上さんと言ひ合つてゐましたつけ……」

「さう……」

考へるやうにしたが、「それぢや何處かに泊るから、母さんにさう言つておくれ」
婆やはすぐ歸つた。

80 お八重はぶるぶると體中が戦へるやうな氣がした。それに、恐怖の念、自暴になつてゐるのかも知れないといふ恐怖の念も手傳つて、足も體もすぐむやうであつた。と思ふと、一方では母親と相對して坐つてゐる男のさまがそれとはつきりと見えるやうな氣もした。「兎に角、歸るのはいけない、さういふ處には歸らない方が好い」かうだけは決心したが、種々の雜念がそれからそれへと起つて、何が何だか自分でもわからなくなつた。

其處へHから又電話がかゝつた。

「私一人！」かう電話口へ出て言つたが、「さうK姐さんがゐるの？ お客様は？ あゝ、さう……。なら、伺ふわ」

お客と言ふのは、相場で儲けたPといふ人であつた。別に氣のおける人ではなし、「丁度好い、M屋のK姐さんもゐるんなら」かう思つて、車が來ると、そのままた土手の夜をHへと急がせた。

土手の上を通ると、矢張そこに交番がある。巡查が立つてゐる。ところどころに待合や料理屋の軒燈があかるく闇を照してゐる。丁度去年の今頃、K町の藝者のMがBを思ひ切りかねて、お客をだしに此地に來て、そこへ自分とBが行つて、曾て自分がその女からかゝされた侮辱を小氣味好いほど復仇してやつたことがあつた。それをお八重は思ひ出した。そのMといふ藝者は、その時べろべろに酔つて、Bにくつてかかつたりした。しかし、それももう昔のことだ。

且の方へ入る路の角に、車が曲らうとした時には、ふと夜空を闇に隈取つて立つてゐる二階家が眼に附いた。そこに一時お八重はよく行つた。その男はPと言つた。その男はお八重が自由にならないので、ピストルを擬したり毒薬を仰ぐ真似をしたりした。男の眼から大きな涙のほろほろ落ちるのをお八重はその時始めて見た。それも、今のBが出来たためであつた。「その怨恨が今でも取附いてゐるのかも知れない。それで、Bとはどうしても夫婦になれないのかも知れない」かう思ふと、男の怨恨と言ふことが空恐しく考へ出された。無意識に、かういふ稼業をしてゐるために、別に深くも考へずに、男に對する無数の欺騙と虚偽と薄情とをこれまでやつて来たことが自分の身にはね返つてありありと浮んで来た。此間も、旦那が「さういふ稼業が不自然なんだよ。誰だつて、たとへ、關取だつて、又、その關取がぞつこんお前に惚れてゐたからたつて、お前が稼業をしてゐる中は、お前の思ふやうにならないよ」と言つた言葉も思ひ出された。

33 今になつて、二十八になつて、今まで自分のやつて来たことが始めて一々振返つて考へられるやうな氣がするのであつた。いろいろの男の怨恨やら生靈やらが執念なく自分の體に絡み附いてゐるやうな氣がした。

……ふと、そのMが、今、アメリカに行つてゐて、お八重の後に出来たKといふ妓に、月々彼地から仕送りをしてゐることが思ひ出された。何でもかなりに多い金を送つて來るらしかつた。またその金を送るために、Mはアメリカで危ない飛行機の乗手になつて命を的にかけてゐるといふことであつた。此間もそのKといふ妓の指に彼地から送つて來たらしい大きなダイヤが光つてゐた。歸つて來たら、又一騒動起るに違ひない。現に、そのKといふ妓は、平氣で情夫を家に入れてゐるから……。かう思ふと、ピストルや毒薬が又お八重の眼に浮んだ。お八重はゾツとした。

且ではさう長く騒いてゐる時間はなかつた。お客とその馴染の若い藝者を取巻

いて、M姐さんとお八重とは、のんきなことを言つて三味線などを弾いた。「八重ちゃん、花でもやらうか」かうお客の言ふのを、「今日が頭痛がして仕方がないから」と断つて、廊下でソツとM姐さんにその話をした。

「さうかえー!」M姐さんは聲を低く、「それは心配だね。いゝと、ね……。その代り、私と一緒に寝るんだよ」

「えゝ、えゝ、結構ですとも」

「なら、お前さん、早く家に行つてお出でよ。ひどく風邪を引いてるやうぢやないか。あとは私がよくするから……」

「でもね……」

「いゝツて言ふのに……。まだ、お前さん、正月の風邪が治らないぢやないか」

「無理をするもんだから」

「だから、早くお歸り」

「さう……。姐さん、すみませんね」

で、お客にもさう言つて、歸らうして帳場の處に來ると、其處にゐた女將は、

「八重ちゃん……」

かう手招きした。

其處には誰もゐなかつた。明るい十燭の電燈が長火鉢や、茶箆筒や、銅壺に浸けた徳利などを照した。そこにかゝつた時計は十二時五分前の處を指してゐた。

「來たよ、お八重ちゃん」

「あれが……」

「あゝ」

「いつなの?」

「昨夜の十一時すぎ」

「さう」

お八重は女將の顔を見た。此處には前にも男を伴れて來てゐるし、それにお八重は女將に何も彼も話してゐるので、女將はそのいきさつをよく知つてゐた。

「ひとりぢやないでせう」

「M屋とさ」

「ぢや、あそこから來たのよ。あそこから私の家に迎へをよこしたさうたけども、行かなかつたから「やめる決心」を女將もそれを猜してゐた。

お八重はやがて、

「で、泊つて行つて？」

「今朝、自動車で歸つたよ」

「何か、私のことをわろく言つてゐたでせう」

「よく聞がなかつたけれど……。M屋と二人でいろんなことを言つてゐたつて……。お母さんのことを大變わるく言つてゐたよ」

「だって、お上さん、仕方がないものね。私だつて、厭ぢやないけども、身がつまるばかりだから」

「さうねえ」

こんなことを話してゐる處へ、M姐さんが入つて來て、

「まだ、ゐるのかえ、八重ちゃん」

「もう行くのよ」

かう言つて、お八重は立上つて、そのまゝ襦袢を取つて、「照どんが來たら、箱をわたして下さい」と頼んで、そのまゝ寒い戶外へと出た。M姐さんの家は、そこから少し行つて左に奥深く入つた所であつた。

姐さんの家には、老母が一人ほつねんとして起きてゐた。妹はゐるのだが、これが半分狂氣で、よく姉や母に手向ひをするので、今では親類にあづけてある。お八重は手短かに今夜泊めて貰ふ話をする、「えゝえゝよう御座んすとも、お安

「御用だともね、お前さん」かう言つて茶など淹れて呉れた。

老母と話してゐる中にも、家のことが絶えずお八重の氣にかゝつた。男が母親と相對して坐つてゐるさまが歴々と手に取るやうに見えた。思ひ詰めたり、打消したり、又思詰めたりして、時にはいつそ自分が行つて話をつけやうかと思つて起つて見たりしたが、又思返して座蒲團の上に坐つた。炭をついでもついでも、水をかけられるやうな深夜の寒氣が後から迫つた。お八重の昂奮した青白い顔は彫塑のやうに一間に浮き出して見えてゐた。

人の好い老母は、人の心も知らずに、又しても興味も惹かない四方山の話を始めるのであつた。

其處に誰か來た氣勢がした。老母は立つて行つた。話聲で、それは自宅の婆やであるのが解つたので、お八重は立つて其處に行つた。婆やは母親に吩咐けられて、着替と寢衣とを持って來たのであつた。

「まだゐるの？」

「え」

「何うしてゐるの？」

「何うしても姐さんか歸るまではゐるツて、ひどい權幕です」

「さう」

お八重は下唇を咬んで、「しやうがないね」

「でも、姐さんには、何うしても歸つて來ちやいけないツて、母さんが言つてゐました。かういふ場合だから、どんなことをされるかわからないからツて……」

「さうね——」

で、婆やは歸つて行つたが、お八重はお座敷着を寢衣に着替へて、その上に着替を着て、帶をしめて、丁寧にその脱いたお座敷着を疊んだが、ふと、隣の間、床が取つて行火がしてあるのに目を附けて、「母さん、私ぞくぞくしてしやうがな

いから、御免を蒙つて、行火に當て、頂くわ」

「何うぞ、さア」

かう老母は出て来て勧めた。座蒲團などを持って来て呉れた。

姐さんの寢衣のかゝつてゐる行火に凭りかゝるやうにして當りながら、お八重は顔の半面を搔卷の上に横に當てた。體がぞくぞくと寒氣がした。その癖心は火のやうに燃えて動搖した。種々なシーンやら、思ひやらが走馬燈のやうに早く早く廻つた。

三十分ほどして、格子が明いて、M姐さんの歸つて来た氣勢がした。姐さんは老母を相手に着物を着改へたり何かしてゐる様子であつたが、お八重はそこにゐるたまたま立つて行かないので、

「八重ちゃん、何う？」

40 「何うも、寒氣がして……」止むを得ないやうにしてお八重は立上つて、「姐さん

41 の歸るまで待つてゐるやうと思つたんですけどもね。寒くつて、ぞくぞくして、又、風邪をひいたやうな氣がしたもんだから、……」

「當つてお出でよ」

「いゝえ、もう大分暖くなつたの……。さつきは寒かつたにも何にも……」かう言つて、お八重は長火鉢の前に来て、M姐さんと相對して坐つた。

丁度その時分、お八重の宅では、男が、「何處に行つたんです。もう時間すぎだ。時間すぎまで藝者がお座敷にゐるわけがない。何うしたんです」と言つて母親に迫つた。母親は寒い夜を黙つて相對して坐つてゐたが、「でも、仲にでも行つたかも知れませんか。さうすると、とまりになるかも知れない。折角待つてゐても、歸らないとお氣の毒だから、話があるなら、また明日もあることだから、今夜はこれでおとなしく歸つて下さいませんか」と言つた。男は大きな腕を組んだまゝ、黙つて了つた。

六

床に入つてからも、娘とお八重とは、絶えず何かくどくど話してゐるので、それが耳について、M屋の老母は容易に眠ることが出来なかつた。いくらか高調子の娘の聲と低い細々としたお八重の聲と、それが互に雜り合ひ纏れ合つて、續いては絶え、絶えてはまた續いた。

男と女との辛い苦勞、離れやうとしても容易に離れることの出来ない煩悶、ある男を捨て、ある男についたために起つて來た不幸福、何方が本當かわからないので迷ひに迷ひ抜いて、その揚句神信心をするやうになつたほどの苦痛、男の欺騙と女の欺騙、到底互に知ることが出来ない性の相違、さういふ話が、さまざまの人生の經驗と苦痛とを経て來たM姐さんから話されると、お八重は又お八重で、

辛い女の涙、惚れても男が本當にして呉れない悲哀、一家の犠牲になつた身の不仕合、旦那への義理、父親ののんきな性分、母親のガミガミした氣質、男の頼りに出来ない話などをそれからそれへと話した。世路の難儀、人生の孤獨が、かうした歡樂の巷にも、矢張隙もなく犇々と押寄せて來てゐるのであつた。

M姐さんは土地では評判な名妓で、一中か上手、それにお座敷の取巡し、昔の江戸藝者としての作法、故實などにも通じてゐるので、何處の一流の藝者が來ても、決してヒケを取つてはゐらない方であつた。若い時は美しい氣分の好い藝者だつたので、今、實業家で鳴してゐる人達の世話になつて、金なんか何とも思つてゐなかつた。金の勘定を知つてゐるやうな藝者は藝者ぢやないと思つた。指環、金時計、衣裳、あらゆる榮華と豪華とを盡して來た。それに、M姐さんと言へば、一時は土地でも誰も首が上らないといふほどの勢力を持つた。しかし、今は老いた。何方へと言へば、節操を立てた男にも捨てられた。抱妓を置いて、一人も

盲目行かずに、金を踏倒されたり、男とつれ立つて遁けられたりした。それに、疳癩持の、我儘な、思ひ上つた性質は、昔のやうに勢力のなくなつた今でも、矢張改めることが出来ないで、常に敵を多くつくつた。他の土地から来た若い妓などは、いつもかの女の意地わるい行爲に由つて泣かされた。

「さまを見ろ、餘り意地のわるい真似をするからだ」かうこそは言はないが、段々落目になつて行つたM姐さんの境遇は、決して幸福な方ではなかつた。否、幸福どころか、二三年此方、いろいろな病氣をして、碌々お座敷もつとめることが出来ない頃には、家の者も何うして生活を立て、好いかわからない位であつた。それに、運わるく、弟が狂氣になる。つゞいて妹も半分物狂ほしくなる。本家の方の弟も、商賣に失敗して、家どころけ込む……。M姐さんは、今になつて、染々浮世の辛さを覺えた。

44 Oさんといふ今でも金持の大きな實業家があつた。M姐さんは、長年その人に

世話になつた。その人は、今でもM姐さんを最負にして、家に宴會などがあると、M姐さんを心に大勢土地の藝者を聘んで、祝儀の五六圓づゝも出すのが例だが、その人が「何うだ、M、今になつて後悔しても追つかないだらう」などと云つて笑つた。その時ほどきまりがわるかつたことはなかつたとM姐さんは話した。

「だから、折角の運を取り遁すこともあるんだからね」
かうM姐さんはお八重に言つた。

又、男の心といふことに關しては、「さうともね。いくらお前さんに惚れてたつて、お前さんには旦那があつて、その人が始終來てるんだから、關取の方だつて、十のものなら五つ位しか出て來られないにはきまつてるよ」と言つた。平生、旦那が言ふのと同じやうなことをもM姐さんは言つた。

話は絶えては又續いた。何方かと言へば話し好きな、寧ろ自分のことばかりを勝手に饒舌るといふやうなM姐さんの話は、後にはお八重にも聞くのが面倒にな

つた。それよりも宅のことが氣にかゝつた。まだゐるだらうか。まだ起きてあそこに黙つて母親と對して坐つてゐるだらうか。それともあきらめて歸つて行つたらうが。つゞいて男の失意な境遇を思つた時には、折角來たのに、その話もきかずに、逢はずに遁けかくれて、かうしてゐるとは、何といふ薄情な自分だらうと思つて、今からでも、歸つて行つて逢はうかとも思つた。

二時が鳴り三時が鳴つた。

それでもM姐さんは、その長い話を容易にやめなかつた。後には、お八重はその受答へするのさへ懶かつた。

「あゝ、何うなつて行く身か」
溜息がひとり手に出た。

46 四時が打つて、とろとろとしたが、眼が明くと、もう朝で、黎明の光が靜かに雨戸の隙からさし込んで來てゐた。

寒い寒い朝で、體もちぢこまるやうな感じがした。外には凍つた路を車のがらからと通つて行く響が寒く冴えてきこえた。お八重はもう何うしても眠られないので、そのまゝ起きて、着物を着て、枕元の雨戸を一二枚明けた。霜は隣りの藝者屋の瓦を白くしてゐた。

餘りに種々なことを思つたのと、疲れたのと、寢不足とが、お八重の頭を、體を、心を、ほんやりさせた。お八重は世界の果ての果てに來たやうな氣がした。死ぬのではないかと思つた。

「お前さん、馬鹿に早いね。もう少し寢てお出でな」

M姐さんは、ちよつと眼をさまして、ちやんと着物を着替へて其處に坐つてゐるお八重を見てかう言つたが、寢かへりをするとそのまゝ、軽い呼吸を立て、再び靜かに眠つて行つた。

勝手元ではそれでも老母が起きて朝の仕度をしてゐた。

婆やの迎へを受けて、宅に歸つて行くと、恐しかつた男の権幕やら、何やら彼やらの話が、お八重の歸るのを待ちつけるやうにしてゐた。

母親も妹のお孝も終夜寝なかつた眼をはれほつたくさせて、昂奮した顔をして、お八重を迎へた。

「母さん、床をとつて頂戴な……私たまらない」

長火鉢の傍に行つて坐つて、青白い額に手を當てゝゐたお八重は、かう言つてすべての話を押へるやうにした。

48 父親は朝早く役所に出てもう家にはゐなかつた。昨夜、男の坐つたところにお八重は坐つてゐるが、妹が床を延べる準備をしてゐる間、

49 「寒い何のつて、私、今でもゾクゾクしてゐるんだよ。」胸を押へて、「それに、此處が痛くつて……」

「風邪を又ぶり返したんだらう」

その返事はせずに、「あゝあゝ、私なんか早く死んで了ふ方が好い。死ねば、私の心はわかるんだから、母さんにも、關取にも、旦那にも……」かう言つて、ぐつたりそこに倒れるやうに身を横へた。

「そんなところにねると、風邪をひくぢやないか」

「放つて置いて頂戴よ」

ひきつけさうに眼を白黒にさせたので、母親は吃驚して、

「何うかしたのかえ、お八重！お八重ツと言ふのに！」

「放つて置いて……」

仕方がないので、そのまま、妹と母親とは、お八重を座敷の八疊に敷いた床の

中に入れてやつた。上にかけてたモスリン友禪の派手な蒲團がお八重の瘦せた蒼白い體と顔とを埋めるやうにした。

「気分でもわるいのかえ」

心配になるので、母親はその傍に行つて顔を覗き込んで訊いた。

お八重は唯頭を振つた。

昨夜の話もあるが、それもしたいが、餘り昂奮してゐるので、しばし落附かせてからと思つて、母親は長火鉢のある方に來て、成るだけ靜かにしてゐた。妹も心配さうな顔をして黙つて坐つてゐた。

昨夜からの疲労やら、睡眠不足やらが出たらしく、やがて靜かに落付いてお八重の眠つて行くのを母親は見た。暖かい朝日は南向の縁側から、硝子障子を越して、モスリン友禪の蒲團の上に明るくさし込んで來た。床の間の花瓶にさした梅は、白くあたりに際立つて見えた。

「お前もお寢な」

母親は妹のお孝に言つた。

「私は好いわ」

「だつて、お前は唯の體ぢやないんだからね。無理をして、あとで、お産でも重かつたりすると大變だよ」

「大丈夫ですよ」

かう言つたが、それより、姐さん、お醫師でも呼んで來なくつても好いのかしら」

「あとで呼ぶなら呼ぶから、お前お寢よ、終夜寢なかつたぢやないか」

「私、好いの、そんなに眠くない」

で、母親は昨夜も男と對座しながらもやつた例の眼を蒸す藥の入つてゐる土鍋を後の戸棚から出して、鐵瓶を下して、それを火の上にかけてたが、やがて頻りに

赤くなつた眼を蒸した。婆やは製つて来た低気圧には丸て無關心のやうな顔をして、いつものやうにバケツを持って来て、縁側から茶の間の拭掃除をした。

明方まで男は其處に坐つてゐたが、M屋のおやぢが来て、いろいろになだめて伴れて行つた。そのおやぢが又やつて来たらしいので、母親は慌てゝ立つて、お八重の寢てゐる座敷が見えないやうに、又はその會話をお八重にきかせなうやうに、上り端と座敷との中の襖を閉めて、それから障子を明けて、入口へと出て行つた。M屋のおやぢは格子戸の前に立つてゐた。

「歸つて来には来ましたが、ひどい熱で、とても、逢つてお話することなんか出来ませんから……」

かう小声で母親は言つた。

「さうですか」M屋のおやぢは困つたやうな顔をしてゐたが「昨夜は矢張、仲でしたか？」

「え……」

暫く考へてゐたが、

「それぢや、また……」

かう言つておやぢは歸つて行つた。

勝手のところ、妹のお孝に、「あのM屋のおやぢ、いやな奴だ。去年、困つたから、ちよつと頼んだら、それを好い氣にして、一廉世話でもしてやつてゐるやうな顔をしてやがる。矢張、取巻いて、一杯でも餘計に飲まうつて言ふ腹なんだからな」

こんなことを母親は言つた。

母親は昨夜の光景をありありと頭に浮べてゐた。餘り遅くなつてもBが歸らぬので見かねてお孝が「をぢさん、また明日もあるんですから、母さんは眼もわるいし、それに、朝も早いんですから」と言ふと、男は、激昂して「そんな愛憎つか

しを言ふもんぢやないぜ。をぢさんをぢさんなんて言つて置きながら」かう言つて怖い眼をした。何うなつて行くことかと母親は思った。この事に關しては、もう何も言ふまい、何も口をきくまい、お八重の思ふまゝにさせて置かう。かう去年も決心したことではあるが、一方はあのやうに腹を立て、一方はかうして寝てゐると思ふと、矢張心配せずには居られなかつた。それに、お腹の大きい妹娘にまでさういふ心配をさせるのが可哀相であつた。妹のお孝は矢張長年この低氣壓に苦んで來た。だから、かういふことがあるとわると思つたから、家に呼んで産をさせるといふ相談が出た時にも、母親は餘り賛成しなかつた。それなのに、姉は先に立つて、家に来て、産をさせることにした。「本當に、お前、心配おしないでよ。體にさわるよ」かうまた母親は小聲でお孝に言つた。

午近くなつた頃には、それでもお八重は疲れた眠から覺めて、眼を明いて、硝子越にさし込んで來る明るい日影などを見てゐた。昨日結つた髪が半壞れて、頬

には涙の傳つた跡が見えた。

傍に行つた母親は、そのまゝお八重の手を握つて見て、

「熱があるぢやないか、お前」

「矢張苦しい」

「何處が苦しいんだえ？」

「胸が——」

「ぢや、お醫者を呼んで來やうか」

「さうね……日さんにも來て貰ふかね」

「昨夜、無理をしたんだらう？」

「だつて寒かつたんだもの。それに、M 姐さんが自分の話しばかりして、ちつともねかさないんだもの。」

で、母親はその傍に寄つて、小聲で、靜かに昨夜の話の一五十什をした。とて

もあの権幕ではお前など歸つて来ては大變だと思つたことなども話した。お孝に言つた話、その他いろいろと詳しく話した。

「何うして、そんなに怒つてゐるんだらう。怒られる覚えがないね」

「いくらかヤケになつてゐるんだよ」

「ヤケになつてゐたつてさ。此方でこそ言ひたいことが澤山ある」

「本當ともね……」母親はかう言つたが、更に聲を低くして、「矢張、三日目に、お前が場所に行つたことをとつこに取つて言つてゐたよ。新潟に行つたつて言ふから、ゐないものと思つて、訪ねても來ないでゐると、不意に場所に顔を出して、弟子の△に祝儀をやつたり何かして、散々人に耻辱をかゝせたつて言つてゐたよ」

「へえ……」

「お前、三日日に行つた時に、誰か關取衆に逢つたかえ？」

56 「逢つた……」Kにも逢つたし、Uにも逢つたし、あゝあゝ、それからSに逢つ

た。「考へて、さうだ。あいつが言つたんだ。Sが言つたんだ。そら、ね、母さん、Sは私がまだ此處に來たてに、不見轉をしてゐる時分に、一二度出たことがある奴なんだから、それで何とか言つたんだよ。此頃は何うした、向ふへ行かないのかえ？位言つたんだよ。さうだ、さうだ、それに相違ない」

「さうかも知れない」

「でなけりやKだつて、Uだつて、そんなことを言ふ男ぢやないんだから」

かう言つたお八重の胸には、侮辱された失意の男の心の状態が眼に見えるやうな氣がした。この五月には廢業する男が可哀相になつた。と、絡み着いた思ひがまたお八重の心を捉えた。

もつと細かいことをお八重は知りたかつた。何うせ、逢つて聞けば、男は此の前のやうなことを言ふにきまつてゐる。「男として送られないわけがある」かう言ふにきまつてゐる。しかし、相撲が取れなくなつて、いよく此の五月には廢業

することになつてゐるのだから、もつと眞剣に自分の身の末をも考へなければならぬ筈だ。養老金だつて、成だけ多く取りたいから、幕下に下がるのを厭つて今度やめるのである。従つて本當に考へてゐるなら、私のことを思つてゐるなら、——またいくらか金があるなら、さうした昨夜のやうな態度に出でずに、素直にやつて来て話せば好い。それをしないのを見ると、矢張依然として金には困つてゐるのである。養老金だつて前借に前借をして了解つたかも知れないのである。又、疑つて考へれば、あゝいふ男のことだから、他に女があつての所業かも知れない。思へば思ふほどいろいろなことが頭に集つて来て、また胸やら體やらが苦しくなつて来た。

それに、一方では、折角これまで辛抱して来たのだ。それが水の泡になつて、又別れる時にこれと同じやうな苦しみをしなければならぬと思ふと、自分から出て逢ひに行くことの無謀と無策と不量見とを思はずにはお八重はゐられなかつて来た。

つた。右にも左にも動けない、自分の身で自分が自由にすることが出来ないのをつくつく思ふと、今度は悲しくなつて涙が溢れて来た。

その日はM屋のおやぢがさつき来たきりで、其後は何の音沙汰もなくて過ぎて行つた。SとMとから口がかゝつて来たが、病氣だと言つて、お八重はそれを断つた。お約束も四時からあるのであるけれども、従つて其方の方へも出て行かれないなかつた。お八重の枕元の日影は次第にかけて、漸く障子に當らなくなつた。外は思ひ切つた好い天気で、寒いけれども風もやんで、碧い空には白い雲がふわりと一片かゝつてゐるばかりであつた。お八重はそれを見てまた涙を流した。来た醫者は心臓がわるい上にひどい風邪を惹いたのだと言つて歸つた。お八重の枕元には、やがて水色の薬の入つた罌と解熱劑の入つた紙袋とが盆に載せられて並んだ。熱は三十八度五分あると言つた。

しかし夕方になつて、矢張Bがその近所の待合に来てゐるらしいのを、何うか

してお八重の耳に入れまいと母親は思つたけれど、何うしても入れずには置けなかつた。それから又やゝ静まつたお八重の状態は動搖した。熱も多く出て来た。父親の歩き方が荒いと言つては、お八重は疝癢を起した。矢張意志と感情とは、絶えず凄しくお八重の胸で衝突して火花を散した。蒼白い冷めたさうな顔を見せてゐるに拘らず、母親が手を當てゝ見ると、お八重の頭は灼けるやうにほてつてゐた。

夜中に、急にお八重は胸が痛い！痛い！と言ひ出した。俄かにさし込みがやつて来たのを母親も妹も見た。お八重の顔は死人のやうに蒼白かつた。

「父さん！」かう下から呼んでも、眼が覺めないのので、母親はドタバタと二階に上つて、「父さん！お八重が大變だ」と叫んだ。父親は慌てゝ飛び起きて、着物を着改へるのもそこそこに醫者へと走つた。

「あゝ苦しい！苦しい！」

蒲團の上に半は身を起したお八重は言つた。その胸を母親は強く押へた。

「婆や、お前は氷を買つて来てお呉れ、」かう母親は叫んだ。

世間は皆な寢静まつてゐる中に、此處ばかり物が皆生きて動くといふ光景を呈した。お孝はオドオドした。此方に引張つて来る筈の電氣の紐を向ふに持つて行つて吊したりした。やがて歸つて来た父親は、マゴマゴして、彼方に行つて坐つたり此方に行つて立つたりした。折角、婆やが氷を買つて来たと思ふと、今度はそれを入れる氷嚢が探しても探してもなかつた。父親は二階に行き、また下に下りて簞笥の中を減茶減茶に探した。

「苦しい、あゝ苦しい……！」

かう言ふお八重の叫聲が、さうした深夜の空気を縫つた。

漸く抽斗の中からさがし出した氷嚢に、氷を入れて、それをお八重の灼けるやうな額に當てゝゐる時、漸く待ちかねた醫者はやつて来た。かれはすぐ傍に寄つ

て診察したが、「フム、少し痙攣を内部に起したんですな。なアに、そんなに慌てる必要はない。一つ注射をやつて見ませう。そしたら落附く」かう言つて準備して持つて来た注射器を靴の中から出して、薬を入れて、そしてそれを腹部に注射した。

見る見るお八重の苦痛の薄らいて行くらしいのを母親も妹も醫師も見た。「これで、少し落附かせて寝るやうにして御覽なさい。なアに、ちよつと痙攣が内部に来たんです。心臓がわるいと、風邪でも、かういふことはよくあります。」「醫師はかう言つて、注射器を元の靴に藏つて、そして歸り支度をした。「さうですな。頭は十分に冷す方が好う御座んす。熱はかなりにありますから」立ちながら醫者は言つた。

62 氷嚢を天井から吊して額に當てたお八重は、やがてすやすやと眠つて行つた。心のとつおいつも除れて了つたやうに、又いくら考へても、それは人間の力では

何うすることも出来ないといふやうに……。

母親の床に入った時には、もう三時が鳴つてゐた。母親はその前に、もう一度傍に寄つて娘の蒼白い苦勞の多い顔をじつと見詰めた。可哀相なやうな氣がした。

戸外では風が立つて、何處かで、木戸のボタンボタンと煽られる音がした。

八

一日二日、男からの壓迫が彼方此方から来た。低氣壓はいつ薄らいで行くかわからなかつた。Mのおやぢはやつて来て、今、本場所から「いふ年寄の下に使はれてゐる大きな男が威嚇半分によつて来たといふことを話した。その男の言ふ所では、兎に角此方で稼業をしてゐないと言つて置いて、突然本場所に姿を現はして、男を侮辱したのは捨てて置かれぬといふことであつた。かういふ風では、

病氣が治つても、どんなことをされるかわからぬので、お座敷に出て行くことも出来ない。困つたことになつて来た。家の人達は皆な心配した。

お八重は二三日寝てる中に、自分の運命——戀のいきさつもこれでもう最後近くなつてゐることを考へた。長い物語も、もう終りに近づいた。唯一つ握つてゐた生命の綱をも愈々切つて捨て、獨り広い世界に面しなければならぬことを思つた。男が来て一夜明して行つた三日目に、お八重は床の上に戻り返つて、決心したやうに母親に言つた。

「私、ちよつと出て来るから、髪結さんと呼んで来てお呉れ」

「何處へ行くの、お前？」

母親は驚いて傍に寄つて来た。

64 「ちよつと、Pの親方のところまで行つて来る。場所中だから、忙しいから、逢へるか逢へないかわからないけれど、あの親方にはこの前の時にも世話になつた

し、私とあの人のこともよく知つてゐるんだから、話してよく頼んで来る方が好いと思ふの」

「だつて、その體で、行けるものかね、お前」

「まだ、苦しいけども、車で行けば行けないことはない。私だつて、かうしてるちや、逢ふには逢はれず、それに、此間中なら逢へましたけども、今ちやぢかに逢ふわけに行かなくなつちやつたから。それに話をつけない中は、お座敷にも出られやしないもの」

「でも、ね」

「大丈夫だよ。」母親の顔を見て、「母さん、まだ私を疑つてゐるのね。部屋へでも押かけて行くと思つてるのね。人がこれほど苦しんでゐるのに……」涙を流して、「母さん、これで、お腹は辛いんだよ。」

かう言はれて見ると、母親はその上留ることは出来なかつた。

「でも、今日は風が寒いよ」

お八重は立つて、髪結の来る間、長火鉢の處に坐つてゐたり、便所に行つたり、思ひ出しては流れて来る涙を襟袖の袖に拭いたりした。旦那の深い情も難有いけれど、これと一緒に其方の方をも破壊して了はうなどとお八重は思つた。「さうだ、ちやんと男と切れた話をして、そしてお暇を貰うことにしやう。永のお暇を」

やがて肥つた髪結はやつて来て、日當りの好い縁側に席を敷いて髪を結ぶ道具を並べた。髪を結つてゐる間、お八重はいつもに似合はず黙つて種々なことを考へてゐた。いつも難かしい鬢や髷の出加減を訊かれても、「好いでせう」としか言はなかつた。髪結もお八重がをりをり涙を袖に拭いてゐるのを不思議にした。

「さう、これから場所に行くんですか。さう、それは大變ですね。寒いですよ、今日は！」などと髪結は言つた。

いつも着る大島の着物に黒の羽織を着て、寒くないやうにコートやら襟巻やらをして、やがてやつて来た車に乗つて、お八重は出かけた。

本場所は丁度九日目で、OとTとの取組や、KとMの取組などで人氣がすさまじく立つて、あたりは活氣で漲りわたつてゐた。宵切の札が大きく出でてゐて、一勝負毎にあける喝采の聲があの大いなる建物を揺がすやうにした。

Bは休業してゐるから、そこには出でてゐない。部屋にゐるか、それとも何處かに行つてゐるかである。お八重はしかし成べく其方に近寄らないやうに、又は知つてゐる顔に逢はないやうにして、巧みに人込の混雑の中にまぎれてゐた。お八重の胸にはいろいろなことが往來した。Bと出来た二三年は、本場所の空氣は何とも言はれない憧憬と愛着と誘惑とを女に感させた。かの女は自分の男のために勝を神に祈つたことも一度や二度ではなかつた。強敵に勝つた時には思はず自分を忘れて喝采した。何の力士よりも、肌が綺麗で、際立つて四邊に見えるのも嬉

しかつた。しかし、その歡樂も過ぎ去つた。否、過ぎ去りつゝある。男はもう二度とあの土俵の上にその姿を現はさないのである。約束したあの夫婦の起證ももう反古になるのである。かう思ふと、お八重は堪らなくさびしい心地がした。喝采の聲がまた聞えた。しかも驚くべき、大きな建物が割れるばかりの喝采が、暫しは鳴りやまうともしない凄しい喝采が、ワアワアと天地もひつくりかへるやうな喝采が。

「Oが勝つた。Oが勝つた」

かう言つて、群集はぞろぞろ出て來た。また喝采が続いた。

「Tが負けたんですか」

お八重は思はずかう言つて、傍の群集の一人に訊いた。

68 場所がはねて、群集がわいわい出て來た時分には、お八重は前の茶屋の端近い一間で、四十位になる意氣な上さんと相對して話をしてゐた。それは年寄Pの妻

69 で、かねていくらか知つてゐたのであるが、そこらをぶらぶらしてゐる中に運よく

お八重はばつたりその上さんと顔を合せて、それから此處に來たのであつた。

「もう、ぢき、宅に歸るでせうから、宅の方へ入らして下さい。その方が話がよく出來ますから」

かうその上さんは言つた。

上さんとそこで二十分ほどお八重は話したが、そのあとをお八重は猶一時間ほど待たなければならなかつた。風は寒く廣場に散つた蜜柑の皮やら烟草の吸殻やら竹の皮やらを吹いた。

80 土産に蜜柑などを買つて、お八重が其處から程遠からぬPの親方の家を訪れた時には、もう日はすつかり暮れて、灯が明るく街の家々についてゐた。車を門前に待たせて案内を請うたお八重は、先づ自分を瀟洒な梅の花の床の間に生けてある八疊の一間に發見した。つゞいて、さつきの上さんが出て來た。婢が茶や菓子

運んで来た。最後に、上さんが席を外すと、それと同時に肥つた。がつしりした、昔名高かつた力士の面影のそのまゝ残つてゐるP親方が襖を明けて静かに落附いて入つて来た。

「まア、お敷き！」

かう言つて、お八重が外して挨拶したモスリン友禪の座蒲團を勧めた。

お八重の話し出す話を、P親方はフン、フンと大きく點頭いきいてゐた。絶へず微笑を顔に湛えながら。又時々傍の烟草盆から烟草を長い烟管につめながら……。

「さアな」

70 聞終つてから、少し考へて、「わしが言つてやつても好いがな……。今はちよいと困るんだ。何故と言ふと、Bはもう廢業することになつてゐるから、まだ籍は置いてゐるやうなもの、協會とは、まア言はゞ、いくらか縁が薄い人になつて

71 ゐる。五月からは、もうこの場所の人ではなくなるのだから……。だから、わし

が言ふのはまづい……」考へて、「よし、よし、いゝことがある。Bの知つてゐるもので、Wといふ男がある。大阪で矢張相撲を取つた男だが、あいつがわかる男だから、あれに言はせることにしやう。それが好い。實際、さういふ風ぢやお困りぢやらうから」

このP親方は、去年Bと行末一緒になることについて、種々世話にもなつたことがあるので、それから種々な話がお八重と親方との間に出た。「Bも實は可哀相なんだ。運がわるいんでな……」かう言つて話されると、男の落目になつてかういふ話を持出した自分が後めたいやうな心持がした。

その親方の口からは、お八重は今まで疑つてゐた巡業中の男の話を何彼ときくことが出来た。親方はBの不運には同感してゐるが、賭博と女とにかけてのBの失敗には度々ひどく困らせられたやうな口吻であつた。下の關での事件などを親

方は話した。「なアに、警察沙汰になつたなと言ふのはうそだが、それよりも、わしが監督で、禁じてある賭博を先に立つてBがやつてゐたものだから、それで、黙つて居られなくつて、事が大きくなつたんだ。それに、Bといふ男は、わるいと言つて謝罪せん男で困る」

72 Bは大阪から金まで送つて来て、衣裳を取寄せた。それに就いての男の心も、P親方の話を聞いてゐる中に、お八重にも段々飲み込めて来た。Bは歸るにはいくら金を持つて歸らう。それに自分はこの場所きりで廢業のつもりである。金を儲けたくつても、今を外しては機會がない。で、かれは自分の故郷の淡路行つて、SとPとで三日興行した。無論、自分が勸進元になつて……。ところが、生憎な雨で、その計畫はすつかり外れて、利益どころか、かなり大きな損耗になつて、すつかり協會に借が出来た。P親方の話では、Bの廢業の養老金も、それをさし引いたり何かすると、もういくらも手に取るところはないといふことであつ

73 た。お八重は愈々男が可哀相になつた。

一時間ほど其處にゐて、お八重は宜しく頼んで、そして暇を告げたが、「もう、これでお了ひー」といふさびしい氣がひしと胸を襲つた。

P親方の家に行つたことが後悔されるやうな氣がすると共に、自分の意志の實行——半年以上も苦んだ意志の實行にいよいよ一步を進めたことが考へられた。旦那と、母親と、その他に、今では世間といふものが入つて来た。涙を流しながら、かの女は愈々男に別れなければならなくなつた。まゝにならぬ世の中を侘びながら、幌に包まれて、お八重は家に歸つて来た。

九

一步を進めた意志の實行に、男の失意の境遇と言ふことが、兎角邪魔をするや

うなところがあつたが、しかしその一方では、かうなつてはもう何うにもならないといふあきらめがかなり強い力について廻つた。親同胞の多い身で、細腕で、廢業した力士を立ててすぐして行くといふことはとても以來ない。さうかと言つて、生活上の働を男に望むことの出来ないのは、お八重は今までの経験でよく知つてゐる。何うにもならないといふ考が重く強くお八重の胸を壓した。

約束はこれまでも何遍したかわからない。巡業に立つて行く時には、屹度その約束をした。お八重に取つては、男の約束は、もうあてにならなくなつてゐた。P 親方の世話で、Wと言ふ男のやつて來た時には、それがBの友達であるだけに、始めは出来るものなら話をもとに戻したいらしかつた。

「母さん、何うでせう。もう一度」

かうその肥つた大きなWは言つた。

母親は深く考へ込んで、

「でも、それにはそれと道がついてゐなければ、御返事は出来ませんね。男の方で、それとちやんと道をつけて話を持って來れば、娘だつて、厭ではないのですから、結構ですけども……。唯、このまゝで、元のやうになつて貰ひたいと仰つしやつても、それはお話が出来ないやうなもんですね」

「さうですな」

かうWも腕を組んで考へた。

「それも、娘に、腕があつて、何うにでもして立てて行かれるなら、私なんかは、何うせ娘の世話になつてゐるんですから、別居なり何なりしても好いのですけれども……」

「何うも、母さんには氣に入りませんか、あの男は！」

「氣に入るも入らぬも、今までのあの人の行跡と言ふものが、ちやんと物を言つ

てをりますからね。それは今度なども淡路に行つて一儲しやうと思つたのも本當でせうが、實行して見せなければ、約束しても出来ないんだから仕方がないでは、それではこの世の中は通つて行きませんから……」

「つまり、金ですな……」

笑つてWが言つた。

と、それが母親の胸にぐつと來たといふやうに、「さうですとも……金ですとも、

……あの人に、娘の入揚けたものだって、それはちつとやそつとではありません。一體あの人は、ぐづぐづしてゐて、私は大嫌ひです」

「……………」

「母さん、そんなことを言つたツてしやうがない。折角、話をつけに來てゐて下さるんだから」

76 かうお八重は傍から言つた。

で、それでは仕方がない。「それでは、この話は兎に角びつたり壞すことにしませう」かう言つてWは烟草を吸つた。

Wはいろいろな話をして、猶そこに一時間ほどゐた。かれは三日目にお八重が本場所に行つた話をまた持出して、「別に、Bだつて、亂暴を働く氣ぢやなかつたんです。唯、逢つて一言言ひたいと思つてやつて來たんでせう。何うも、かう言ふことは、難かしくつて……」などと笑つた。そして、歸る時に、お禮にと包んだ金を、Wは竟に竟に持つて行かなかつた。

風邪がまだ治らない身であるに拘らず、お八重は、その夕暮に、再びその姿を本場所近い巷路の中に現はした。

「此處等にWといふ人の家はありますまいか」

かうかの女は到る處で訊いた。

誰も知つてゐるものはなかつた。

「困つたねえ、何でもこの邊だつて言ふことは聞いたんだがね」

かうお八重は車夫に言つた。寒い寒い風が夕暮の巷路を吹いた。お八重はガタガタ身を震はせた。

お八重はWの受取らなかつた禮の紙包を何うしても渡して來なければ義理がすまないと言つて家を出て來た。

「何處かできいて來ておくれな。相撲の年寄の下廻り見たいなことをしてゐる人だから」

「Wさんですね」

78 かう訊いて、車夫は驅けて行つた。風は顔も切るゝばかりに寒く吹いた。薄暮

の空には星がもう輝き始めた。

歸つて來た車夫は「此方の通りぢやないんです。この次の通りださうです」かう言つてお八重を車に乗せて、その聞いて來た方の通へへ行つた。

やがて再び車から下されたお八重は、そこに、巷路の中に更に細い巷路のあるのを發見した。

「此處かえ！」

「え、その奥ださうです。Wさんは」

霜解のやゝ氷りかけた路を少し入つて行くと、其處に一軒格子戸づくりの家があつた。しかし灯もついてゐなければ、人もゐないやうで、あたりがしんとした。しかし表札にはその名が書いてあるので、

「御免なさいまし」

かう二度ばかり案内を乞ふと、

「誰だえ？」

かう言つて、ドシンドシン音をさせて出て来たのはWであつた。

「ヤ、姐さんですか」

かう言つたが、棒立に立つてゐて、「何か川かね」

「先程は御親切に難有う御座いました。お蔭で種々なことがよく分りました。…

…」上らうとするのを何うしても上げないので、その紙包を、「これは、お禮と言ふんぢやないんですけども、…ほんのしるしの鯉節の切手ですけど、何うか

お納めして頂かなけりやツて、母が申しますもんですから……」

「入らない、入らない、こんなもの入らない」

「でも……」

「友達のこと、こんなものを貰つちや義理が立たない」

押問答してゐても、何うしても取らないばかりか、後には自分でお八重を押し

出すやうに自分も一緒に出て来て、「姐さんなんか此處に來られちや困るんだよ。此處には若い奴等が來るところなんだから……本當に困るよ」後には巷路のところまで出て来てそれを押し返した。

「困るわねえ」

お八重が困つてゐると、

「そんなに困るんけえ。それなら、お禮に、酒でも飲まして呉れや」

「え、好う御座んすとも……」

「本當は戯談だよ。」

「好う御座んすよ、おつき合しますよ。關取とは昔からお友達の貴方だもの、好いわ、何處へ行きませう」

「好いよ、うそだよ」

「本當に、何處にしませう」

「困るな」

Wは頭を掻いたが、「ぢや橋のそばのT屋で飲まして貰ふかな」

「え、よござんす。ぢや、すぐいらつしやい。私、一足先に行つてゐますから」

「よし、よし」

お八重が先に奥の一間に座をきめてゐると、暫くしてから、そのWは大きな體と莞爾した顔とをそこに見せた。牛のロース、酒、暖かい火は、外とは違つて、その一間を春のやうにした。

「母さんがあゝいふ風だから困るんですよ」こんなことを言つたり、「だから、關取もるにくかつたに違ひない」と言つたりした。お八重は、Wの口から、種々と男の話を訊きながら酌をした。

82 「私だつて、つらくないことはありませんけれど、さうかと言つて、親同胞の多い私の瘦腕では、何うにもなりませんね。それに世話になつてゐる人だつてあ

るもんですから」

「それはさうとも……」

Wは頻りに盃を口に當てた。

Bはこの場所はすつかり休業したが、巡業中は矢張元の通りにやつてゐて、五月からは、郷里に歸るか、それとも外國にでも行つて一族擧げて來るかするつもりらしかつた。「つまり運がわりんさ。この相撲道位見てゐてはらはらするものはねえからね。強くさへあれや、若い奴がぐんぐん追ひ越して行くんだからね。關取なんかも、だから氣の毒だアな」それからそれへとBについての種々の噂が出た。P親方の言つたことも、このWの言つたことも符節を合せるが如くであつた。母親などは、てんからそれを受附けずに、單にわるい蟲とか、悪魔とかいふ風に思つてゐるけれど、矢張男は「女たらし」でも何でもないのであつた。さういふ質なのだ。さういふ生れ附きなのだ。

Bが前に關係してゐたH町のT屋の女將の話の出た時には、

「もう、すつかり綺麗だらう」

「さうですかね、本當ですかね」

「でも、行かんからね」

「さうですかね」

お八重は考へるやうな顔をした。AとTとの引退相撲の話なども出た。最後に、お八重は、紙につゝんだお禮を無理に押しつけるやうにしてWに渡した。

一一

84 その翌日も翌々日もお八重は矢張床の中に入つて寝てゐた。咳嗽が出たり、熱が出たり、胸が癢のやうにつかえて痛んだりした。一度射た矢は再び歸つて來な

かつた。別れの辛さがまたしてもひしと胸に迫つて、涙が襦袢の袖を濡した。お座敷がかゝつて來ても、お八重は出やうともしなかつた。

低氣壓がいくらか軽く薄くなつたやうな氣がしたけれども、母親はまだ中々安心は出來ないと思つた。去年も、もう大丈夫と思ふ時分に、あの騒ぎを惹起した。また何ういふ氣になつて行くかわからなかつた。「姉さんは、ぢき赫となるんだから……あれがわるいんだよ。赫となると、親同胞のことなんか何とも思はなくなるんだから」かう母親は妹に言つた。

肝癢を起して、「母さん、そんなことを言ふんなら、今日でもお孝を大阪に歸して了ひなさい。」こんなことを涙を流しながら言ふかと思ふと、時には、眞面目に、「あゝもう色戀はこりぐ。かういふ辛い思ひは、もう二度としたくない。今度こそ地道に捗ぐなり、旦那に話して、素人になるなりするんだ。母さんや、お孝なんかには、さういふ經驗がないから、分るまいけれど、本當に色戀は辛いもんだ。

それから思ふと、旦那はよくわかつてゐる。旦那だけだからね、私の心を知つて、飲込んでゐて呉れるのは」などと言つた。

「それにしても、何うしたらう、旦那は？」

かう續けて言つて、「人のこんな苦勞してゐるのに、旦那はまだ疑ぐつてゐるにきまつてゐるからね。また逢つてゐるんだらう位に思つてゐるんだからね」

「それは仕方がないよ」

いつもなら、「何故仕方がないの？」とすぐ反抗的に出て來るのであつたが、その日は、不思議にも、「さうね、考へれば、皆な私がわるいんだものね」かう言つて、「母さん、手紙を出して頂戴な」

「あゝ」

「幾日だつたらう？いらしつたのは？」

86 「十一日だよ。お前が行つた三日目の日だから……」

「十一日？さうね、十一日ね。ぢや、もう十日以上になるのね」

「その中いらつしやるよ」

「でも、手紙を出して置いて頂戴、はがきでも何でも好いから……。來たら、皆な聞いて頂くんだ。本當に、旦那にでもきいて貰はなけりや立つ瀬がない」

こんなことを言つて、手を明るい日影に裏返して見て、「瘦せたわねえ」

「本當に、瘦せたわ、姉さん」

「もう、藝者も大抵おしまひよ。もう、こんなお婆さん、相手にする人なんかなくなつたからね」

「まさか……」

かう言つて妹は笑つた。

時には又弟の其處にゐるのに向つて、「正ちゃん、お前は母さんと一緒にゐる氣はないかね」

「ゐるとも……」

「お前はここの家の跡取なんだから、姉さんがゐなくなつたつて、お前がちやんと家をやつて行かなけりやならないんだからね」

「やるよ」

「本當にやつておくれよ。頼むから、後生だから……。姉さんは弱いから、いつ何時、何ういふことがあるかわかりやしないんだから……」

「そんなことはあるもんか」

「あるもんかぢやないよ。姉さんをあてにしないで、しつかり親を養つて行くやうにしなければいけないよ。お前はもう、地道に働けば三十圓や四十圓は取れるんだから。……姉さんも、随分長く家のことをやつて来たからね」

弟は黙つて了つた。

「一體、小さな三間位の家で、いくらあつたら母さんと父さんとお前と三人して

やつて行けるんだらうね」

「いくらもかゝりやしないよ」

かう長火鉢の傍にゐた母親は言つた。お八重の言つた言葉は、母親にはその言葉の持つた意味以上にきかれるのであつた。

「父さんさへ、しつかりして呉れば、正と三人で、お前の世話にならずに、やつて行けるんだよ」

「一體、藝者なんつて言ふ稼業をしてゐるから、親でも、同胞でも、好い氣になつて、世話になるつて言ふやうなところがあるんだよ。此間も旦那がさう言つてゐたが——」

「あのおやぢの意氣地がないために、かういふ目を見るんだよ」いくらか反抗したやうな調子で母親は言つた。しかしお八重はいつものやうにそれを氣にも留めなかつた。

「これからは、しつかりやるんだねえ。姉さんも浮気で、おつちよこちよいだつた。藝者氣質だつた」かう言つて、お八重は溜息を吐いた。

P 親分の處に行つて、薄情のやうな後めたいやうな気分がしたことや、Wが「矢張それぢや金だ」と言つた言葉が執念なく心に絡み着いて離れないやうな時もあった。別れの辛さ——それもあるが、それ以上に、男の失意な不運な身の上と同情される時には、自分がいかにも濟きない薄情な仕打をしたやうに思はれて仕方がなかつた。金もなく、女もなく、ひとりこれから外國にでも行くといふ男の身の上をお八重は何遍となく繰返して考へた。

日影が麗らかに縁側から硝子障子を越してお八重の枕元を照した。

M屋のおやぢが又やつて來た。それはWの宅にお八重が行つてから三日ほど経つてからであつた。同じ藝者稼業で、時には電話を借りたり、又去年のやうにならなと言つても世話になつてゐる身には、嘗なく上り端から應對して追ひ返すわけには行かなかつた。止むなく母親は長火鉢の傍へと請じた。

それは別な用事ではなかつた。男がまたそこに來てゐる。もうちやんと話もつたことだしするから、出來るなら、一度逢つて話をしたい。綺麗に別れたい。「病氣ぢや仕方がないが、何うだらう」といふことであつた。母親はそれを好まなかつた。又、お八重にその話をきかせ度くなかつた。しかし、お八重はそれを聞くと、すぐ起きて來た。

「何處にゐるんです？」

「且にゐるけれど」

「今日來たんですか」

「實は昨夜から來てるんだけど……」M屋のおやぢは酒の匂ひをぶんぶんさせて、今までも現にそこで飲んでゐたのをありありと見せながら、「いゝぢやないか、八重ちゃん。兎に角、話は一應はついたんだしするから」

お八重は考へてゐるが、

「誰か來てるの？」

「今は誰もゐない」

「昨夜は——」

「T屋の抱えとK姐さんが來てるたつけ」

「なら、ちよつと行くわ。こんな扮装してゐるけれど……」

かうお八重が言ふと、

「でも、お前……」かう母親か遮つた。と、お八重は、「だって母さん、向ふが

92 わかつて、さう言つてゐるのに、それでも行けないとは言へないぢやないの？。

母さんはまだ疑つてゐるんだからね」

「さうぢやないけども、病氣ぢやないか。此間中、出て歩いただけでも、風邪をぶりかへして困つてゐるんだから……」

「兎に角、今、伺ひます」

かうお八重はきつぱり言つた。

母親はイヤな顔をしたが、しかし行くといふのを何うすることも出来なかつた。M屋のおやぢは、「私が一緒にゐるんだから、母さん心配になることはありませんよ。……ぢや、また……何うも、此頃は酒ばかり飲んで胃をわるくして困つてゐるよ。……」こんなことを言つて、そゝくさと歸つて行つた。

丁度それは日が暮れてから間もなくであつたが、お八重は別に着物を着かへるでもなく、不斷着の大島の上に黒の羽織を引かけて、髪も碌に梳かうともせず、「ぢや、母さん、ちよつと行つて來ますからね。ぢき、歸つて來ますからね」かう言

つて下駄を鳴らすやうにして出て行つた。

あとでは母親は心配した。あれほどにしたのだから、大抵は大丈夫だとは思ふけれど、P 親方やWまでも中に入れて置いてまさか今更とは思ふけれど、不斷家での舉動やら涙やらを見てゐる身には、さう言つて安心しては居られなかつた。それに、去年のこともあるし……いざとなると赫となる性分だから……。

隣近所の藝者屋では、切火の音がして、藝者の出かけて行く氣勢がした。矢張外では寒い寒い風が吹いた。母親は長火鉢の傍で、娘のことを頭に浮べながら、例の眼薬の片を眼に當てたりしてゐるが、ふと、久しく湯に行かないことを思ひ出して、石鹼と手拭とを婆やに出して貰つて、そのまま近所の湯へと行つた。

お孝は電気の下に裁縫を出して、黙つて針を動かしてゐた。お孝は大阪の夫の許からもう便がありさうなものだ……などと考へてゐた。時々お腹の子の動くのがそれとわかつた。

母親が湯から歸つて來たり、父親や弟が寢て了つたりしても、お八重は容易に歸つて來なかつた。母親の心配は次第に募つて行つた。「何時だえ、お孝」かう訊くと、「まだ早いよ、母さん、十時少しすぎたばかりよ」

「でも、もう歸つて來さうなものだね」

「さうね、もう歸つていらつしやるでせう」お孝はせつせと針を動かした。

十一時過になつて、お八重は疲れたやうな蒼白い昂奮した顔をして歸つて來た。唯今とも何とも言はずに、そのまゝ、長火鉢のところにも坐つたが、頬には涙の流れた跡がありありと見えた。

「大變遅かつたね」

「關取はさつき歸つたんだけど、……Hのお上さんと種々話をして來たもんだから」かう言つて、「母さん、行つてよかつた。すっかり關取の心持はわかつたから……。あの時だつて、ちつとも威嚇すつもりでなんか來たんぢやないんだつて

……。矢張、運がわるいのね。縁がないのね。本當に、淡路に行つて一儲けして歸つて来るつもりだつたのね。……それを、此方は、新潟に行つてゐる振をしたり何かして……」涙が出さうになるのを強いて押へて、「あゝ、あゝ、もう世の中がイヤになつちやつた！」

「で、何うするの、關取は？」

「まア、今までは仕方がないが、これからは心を持ち改へて、外國へでも行つて、二三年働いて来るんだつて言つてゐたよ」ふと思附いたやうに、「それでね、母さん、私ね、この五月の引退相撲を是非やらせるやうに言つて來たのよ。何うせ、私は瘦腕だけども……。これでも一生懸命になつて頼んで廻つて歩いたら、五百枚や六百枚は引受けられないことはないと思ふから、H町のT屋の女將にも話して、向ふにも六七百枚受合つて貰つて、引退相撲を立派にやつて貰ふやうに話して來た……」

「それは大變だね」

母親が顔を曇らせると、

「だつて、Aなんか立派に引退相撲をやるんだもの。私だつて、關取を花々しく引かせたいもの。Aなんかにひけを取つてゐられるもんかね。それに、千二三百枚あれば、あそこが一日千圓で借りられるさうだから、一圓二十錢の切符でも、三四百圓は儲かるんですとさ。私だつて、關取に、その位の金は持たせてやりたなもの」

「なら、お金でやれば好いぢやないか。大變だよ、お前、六百枚引受けては——」
「手切なんか取るやうな關取ぢやありませんよ。母さんはまだ誤解してゐるんだから」涙がハラハラとお八重の眼から落ちた。

暫く沈黙が続いた。

お八重はやがて、「だから、明日、電話をT屋にかけて、ことに山つたら、ぢか

にお上さんに逢つて、その話をしやうと思ふの。お上さんだつて、決していやだつて言ひやしないよ。誰だつて、一度思つた男に、その位の情けのないものはないからね。お上さんが、それはいけないと言つたら、そしたら私も止すわ」

「でも、大變だよ、お前。六百枚ツて口で言へばわけないけれど、いざ頼むとなると、大變だよ」

「それは大變たけども、さうなれば、一生懸命でやるわ」

「他に、關取をひいきにしてゐる人ツていふのはないのかね」

「ないらしいね。あの人は、他の關取と違つて、客の前に出たり、お世辭を言つたりすることが大嫌ひだから、さういふひいきはごく少ないらしいね」

お八重は袂をごそごそやつてゐるが、一枚の書附を出して、それをひろけて見た。計三十四圓五十錢也としてある。

「何だえ？それは？」

「Hの勘定——」

「何うしたのさ？」

「私がすることにして來てやつたの。切れて了へば、もうしてやりたくつても仕てやられないから……。これが私の一番おしまひの情だから何うか、拂はせてお呉れツて言つて、取つて來たの……」

「……………」

母親は呆れたやうな情けないやうな顔をして、娘の顔をじつと見てゐるが、しかも何も言はなかつた。

「お金が欲しい。お金さへあれば、何うにでもなるのに……。本當にお金の世の中だ」かう言つて、両手を顔に當てた。神経性に昂奮した顔に涙がハラハラ落ちかゝつた。それに電燈が明るく照した。

母親の考にしては、娘の態度に何處かまだ信用の置けないやうな處が見えた。

本當に、本當に切れるなら、六百枚の切符、それも金で潰しさへすれば好いのだから、手切と思つて、その中の出来ない分は、何うにか心配してやつても好い。それは、何うせ貧しい身の上だ。あり餘る金なんかは一文もないけれど、本當にさうなら、借金を質に置いて、綺麗さつぱりとしてやりたい。しかし母親には何うしてもまださうとは思はれなかつた、今日逢つたのは——それは綺麗であつたらしいが、うっかり乗つて、またも去年のやうな眼に逢はないとは限らなかつた。「あんなに別れるのが悲しいのかしら、あんなに泣くほど辛いのかしら……。あんな男が何處がそんなに好いんだらう」と、母親には不思議に思へた。

一三

引退相撲のことは絶えずお八重の頭に繰返されてあるらしかつた。父親を捉え

てその話をしたり、弟に、「その時は、お前も骨を折つてお呉れよ。お前の工場だけだつて、十枚や二十枚引受られるね」と言つたり、「あそこにはかうしてやつたことがあるから今度は五枚や十枚引受けて貰はなくちや……」と言つたりした。「旦那だつて……少しは、して呉れるね」かう母親に言つたりした。

今まで寝てるた風邪は、何處かへ行つて了つたやうに見えた。

次の日、朝飯をすますと、ちよつと鏡臺の前に坐つて、すぐ外へ出やうとするので、

「何處へ行くの？」

と母親が訊くと、

「ちよつと、電話をかけて来るのよ」

「丑町へ？」

「あゝ」

で、出かけて行つたが、三十分ほどして歸つて来た。

「何うしたえ？ るたかえ、お上さんは？」

「え、ゐたわ。すぐ出て来たわ。私だつて言ふとね、あゝ八重ちゃん、しばらくでしたわねえツてね。それからその話をしたのよ。でね……電話ぢやね、よくわからないし、それには、ぢかに逢はなけりやわからないからツてね。それに、お上さんはかう言ふのよ。その話をするにも、貴女と私ときりなら、わけはないけれども、それぢや話は出来ても出来ないやうなもんだ。それには矢張、關取も一緒にそこに來て貰はなければ駄目だらうツて言ふのよ」

「初め、變ぢやなかつたかえ」

「さうねえ、變だつた、少し……。何かと思つたら、そんなことですかツて言ふやうなところがあつたわねえ」

「さうだらう」

「さうして見ると、矢張、あれきり關取には逢はないのかね」

お八重は考へるやうにして言つたが、「でもね。少し話すと、ぢきわかつてね。兎に角、それぢや何處かで逢つても好い。忙しくつて、手が明けられないんだけれどツて言ふのよ」

「で、何うしたの？」

「兎に角、關取は部屋にゐるだらうか、ツて言ふから、昨夜歸つた筈だツて言ふと、ぢや此方から電話をかけて見て、都合によつて、又此方から御返事しませうツて言ふのよ」

「變なもんだね」

かう母親は娘の體中をさがすやうにして言つた。

且町から 返事の電話は容易に來なかつた。午後になつても來なかつた。何うしたんだらうとお八重は思つた。部屋に電話をかけると言つたが、電話でなしに、

ちかにお上は部屋に行きはしなかつたらうか。と思ふと、あそこでお上と關取と話してゐる形がありありと眼に映つて来る……何と言つても昔惚れた間柄だ……一二年切つても切らせない位に女の方から深間に入つて行つた戀だ……さう思ふと、體中がほてつて来て、かうしてじつとしてゐられないやうな氣がする。もう一度電話をかけて見やうかと思つたが、それも餘りはしたないやうに思はれてよした。

時間は時間と経つた。お八重は焦々せずには居られなかつた。

と、五時頃になつて、見番の男が「姐さん、H町から電話」と言つて来た。

お八重は何も彼も措いて、急いで出かけた。お八重は電話の聽器を耳に當てて、「もし、もし、お上さんですか、私、八重ですが」

つゞいて、「は、さうですか……さうですか。よくわかりましたか。それで……さうね、私の方でも好う御座んすけれども……土地では、何の彼のツて煩さう御

座いますから、それに、すつかり話がついたことになつてをりますから……さアね、何處が好いでせうね。貴方の方でも、餘り近くではお困りでせうしね。」考へて、「ぢや、いつそ、公園にしませうか。あそこのMなら、靜かで好いと思ふんですが。……なら、さうしませう。Mの方は私がこれから電話をかけますから、それでは、そつちの方は、時間を打合せてすぐ入らつしやるさうにして下さい。では、七時頃ですな……え、よう御座んす……では、その時、左様なら」かう言つて電話は切れた。

お八重は改めて把手を廻して、公園のMに電話をかけた。

それから大騒ぎで、婆やに髮結を探して来て貰つて、髮を結つて、小半時とかゝつて綺麗に梳いて、おつくりをして、着物は着替の派手な縞の裾模様、帯は金ピカのりうとしたのを出させた。大きな鏡に映つた姿は、病氣で寢てゐる時とは丸で別な人かと思はれるほど美しく見えた。

ダイヤの指環をはめながら、

「母さん、お寶を少し……」

「もう、ありやしないよ」

「だって、一文なしぢや行かれやしない……。此間のがあつたぢやないか」

「困るねえ」

かう言つたが、しぶしぶながら筆筒の底から出した金を母親の手から受取つて、それを数へて紙入に入れて、睨と帯の間へ藏めた。

「車はまだ……」

「もう来るでせう」其處等を片附けてゐた婆やは表の方を見ながら言つた。

「成たけ早く歸つてお出でよ。風邪を惹いてゐるんだから」

「え——」

敷島に火をつけてゐると、其處にガラガラと音がして車が來た。もう灯がつい

て、外は眞暗だつた。

「ぢや、行つて來ますよ」

かう言つて出かけた。

公園のMと言ふのは、かなり土地に聞えた料理屋で、觀音堂附近の雑踏からずつと奥に入つたやうな處にあつた。時計はもう七時半をいくらか過ぎてゐた。

「遅くなつたかしら」と思ひながら、大きな玄關前で車を下りたお八重は、「さつき電話をかけて置いたんですが、もう來ましたか」

「まだ、何方もいらつしやいません」

かう其處に出た女中は言つた。

女中はお八重を廊下をぐるりと廻つた八疊の一間へと作れて行つた。そこは前の裁込や泉水を前にしたやうな室で、一方は壁で向ふの客室をしきつてゐるので、靜かな落附いた好い一間であつた。女中はやがて茶と菓子とを運んで來た。お八

重は祝儀を一圓紙につゝんでやつた。

坐つたり、烟草をふかしたり、立つて廊下の鏡に自分の姿を映したりして待つてゐるが、お上も誰も容易にやつて來なかつた。「何うしたのかしら」かう思つたが、もしや向ふでちやんと出來てゐて、復讐的にかういふ眼に逢はせるのではなくかといふ疑なども出て來た。三十分ほど待つてから、お八重は電話口に立つた。お上さんが出て來た「何うもすみません。つい、忙しくつて手が離せないものですから。これからすぐ参りますから」かうその電話は言つた。

又三十分ほど經つた。

ふと自動車の音がしたと思ふと、「入らつしやい！」といふ聲がつゞいてした。愈々來たと思つて出て行くと、果して向ふから、女中に案内されて、曾て一度逢つてゐるT屋の女將がやつて來た。あとから大きな背の高い相撲が續いた。

Bかと思つたら、さうではなくつて、Bの子分見たいな、BがT屋に浸入りに

なつてゐる頃、よく手紙の使ひなどをしたKであつた。Kは成績が好いので、去年幕の内に入つて、今年もかなりによく取つた。昔から比べると、品格などもぐつとついで、鹽瀬のりうとした羽織などを着てゐた。

「お上さん！」

「まア、八重ちやん、遅くなつてすみませんでした。」

かう言つたが、

「關取は？」

「まだ……」

「もう、來てる筈なのに……」

かう言つて、女將は座敷に入つて下手に坐らうとすると、「まア、まア」と言つて、お八重はそれを上座に据ゑやうとする。据はるまいとする、それを何うやら彼うやら坐らせて、「本當に、お忙しいところを御氣の毒でしたわねえ」

「いゝえ、私こそ、お待たせして……」

四十三だと言ふけれども、三十七八、五六にしか見えな小づくりな伶俐さうな、如才のないT屋の女將をお八重は見た。ダイヤの指環、眞珠の指環、帯も着物も濫い中に金目と伊達とを見せて、自分の扮装などはそれに比べていかにけばけばしく野暮であるかをお八重は思つた。流石に皺は少しは見えるが、容色はまだ決して衰へるといふほどではなかつた。

「K關、今年も成蹟が好かつたわねえ」

かうお八重にKは言つた。

「まだ、来てねえんか、B關……。さつき、部屋で逢つた時すぐ行くツて言つてゐたけがな」

Kはこんなことを言つて、女達に少し離れて坐つた。

110 「御病氣はもうすつかりおよろしいんですか」

「まだ、本當ではないんですけども……あゝその節はお見舞を頂いて難有う御座んした。あれから病院に半年ゐて、やつと去年の十月に出て來ましたけれど、まだ、本當ではないんですよ」

「さうですか、それはいけませんね。」

お八重は女將を、女將はお八重をさがすやうに互に見た。

お八重がその話を持ち出すのを、女將は點頭いて聞いてゐたが、寧ろその真相をさがすやうに十分な疑念と觀察とを持つて聞いてゐたが「實はね、お目にかからなくつては詳しいことはわからないと思ひましてね。……」かう言ひ淀んで、お八重の顔を見て、「何うもね。私もして上げたいとは思ひますけれどもね。それにね。又いろいろ家の事情などもありましてね。」

「それは左様ところぢや御座いますまいけれど、引退の相撲も出來ずに、五月からやめて外國なり何處へなり行くと言ひますから、それも氣の毒ですし……。本當

に、私、何んてB 關は不仕合な人だらうと思ひましてね。それで、ふと、思ひついで、女將にお話したらと思つたんですがね。」女將の顔を見て、「それもね、私、今までの通りなら、こんなことは無論申上げませんし、又申上げた義理でもないんですけれども……。私もいろいろ都合があつて。今度綺麗になることになつたものですから……」

涙の出さうになるのを押へて、

「別れたにしても、さうすれば、私の心も通るツて言ふ譯ですから」

「それは結構ですけれども……」

「それに、A 關が引退をするさうですが、あのA 關のことを考へると、腹が立つて仕方がないんですよ、お上さん。さまア見ろ、ぐづだから、女には捨てられ、引退も出来ないで、ぐづぐづ國へ引込みだらうツて、陰では言つてゐるさうですよ。それが口惜しいんですよ、お上さん。B 關の身になつたら、何んなだらうと

思つて……」

女將には次第にお八重の心持がわかつて来るやうに見えた。言はゞお八重は女將に取つて戀敵である。女將とB 關と切れるやうになつたのも、お八重と出来てからである。女將はB 關とは夫婦にはなれず、B 關も又女將と一緒にならうとは思つてゐなかつた。それに女將とB との間柄は、B とお八重との間柄のやうにして出来たのではなかつた。B は大阪から来た當座、何處にもひいきもない、行くところもないので、仕方なしに、よく女將の家に遊びに行つた。女將はB の爲めにいろいろな女を選んでやつた。ところが、その時分、女將の夫である、籍まで入つてゐる夫であるF が柳橋のR 亭の女中のM と深間になつて、滅多に家にも寄りつかなくなつた。女將は愛憎をつかして、籍を取らうとしてゐる中、ふと出来心で、女將の方からB に持かけたといふ形になつてゐた。女將はB の爲めにはあらゆる世話をした。着物から小遣からすべて世話をした。B の女のためにも女將は

尠なからぬ散財をした。Bとお八重と出来た時分には、「これはもうとても駄目だ。一體年もちがふし、私に惚れてゐる譯でもないんだから」と女將は悲觀してゐた。「その方が好い、何うせ私と一緒ににはなれないんだから……その妓の爲めになるやうに。それには今まで私にしたやうなことをしては、とても駄目だから」と女將がBに意見したことも一度や二度ではなかつた。女將はつくづく辛い苦い涙を飲んで来た。女將はお八重の出でゐる土地に来て、お八重を聘んで見たこともあつた。後には、「かれ等の上に幸あれ」と思つて涙を流した。去年、女將がどつと床に伏したのも、實を言へば、その戀の苦惱と煩悶とにさいなまれたためであつた。

女中は膳と酒とを既にそこに運んで来てゐた。女將は一杯二杯と盃を重ねた。お八重が、「でも、私、飲めない上に、ひどい風邪をひいてゐますから」と言つて、断るにも拘らず、女將は無理に酌をした。K關は、丁度向ふの座敷にひいきの客

が来てゐるので、「ぢや、ちよつと御免を蒙る」と言つて向ふに行つた。

「何うしてさういふことになつたんでせうね。矢張、あの人がわるいのかしら」「本當に、お上さん、聞いて下さい。私の方では、決して關取にわるくしたことがないのですから。何うかして一緒になるつもりでゐたんですから。そのため、何んなに義理のわるいことをしたり、これでも女か、人間かと思ふやうなことをしたんですから……」

「ぢや、矢張關取がわるいのかねえ」

「聞いて下さいよ、お上さん」

お八重はかう言つて、種々な話を持ち出した。旅の話、旦那の話、賭博の話、男のしたことが一つ一つお八重の口からそこに展けられた。女將は又それを深い興味——と言ふよりも知らなかつた戀の競争者の状態を詳しく知るといふ意味で深くこの話に引入れられるやうにして聞いた。一年以上の辛い辛勞、煩悶、相手

の女のことを思ふと、赫として身も世もなくなるやうに思つた焦燥、それも離れてゐたため、その状態を詳しく知らないための幻影、大きな幻影であつたことを知つた時には、ある新しい希望が強い力で女將の體に蘇つて来るのを感じた。羨み且つ妬んだ女にも同情することの出来るやうな餘裕の出で来たのを女將は感じた。

女將は今日電話がかゝつて来てから此處に来るまでの間、此處に来てから次第に急轉直下にある大きな障碍のとれて行つた形を不思議にした。優曇華の花の咲いたやうな氣が何處かでした。

「何うしたんだらうね、關取？」

かう言つて女將はもう最初のやうな丁寧な切口上ではなくなつてゐた。女將の顔はほうと赤くなつてゐた。

116 「本當ねえ」

「すぐ来るツていふ電話だつたんですがね。何かまたお頭でも曲けてゐやしないかしら？」

「さうかも知れませぬね」

お八重は立つて行つて電話を部屋にかけた。その返事はゐないといふことであつた。

「何うしたんでせうね」

「本當ねえ、人に、かうして心配させて置いて……K關を呼んで来て、さがして貰ひませうよ」

で、呼ばれたK關は、「そんな筈はないがな」と言つて出て行つたが、やがて戻つて来て、「来るよ、今すぐ来るよ」

「矢張、部屋にゐたの？」

お八重が訊くと、

「え」

「私だから、出なかつたのかしら」

「何が間違ひだらう」

「来るには来るのね」

「これから、自働車で、すぐ行くつて言つてみました」

かう言つてK關は又客の座敷の方へ行つた。

Bの来るまでの間、女將は頻りに自分の身上話をお八重にした。女將はH町の

Hといふ料理屋の女中上りで、そこに家を持つやうになつたのも、半分以上自分が

辛抱した結果であることや、亭主にした男が道樂で道樂で仕方がなかつたことや、

R亭のMといふ女中と婿曳してゐるところに踏込んだ話などをいろいろと話して

きかせた。「本當に、B關と出来ない以前は、私は剃刀のやうな女だつて言はれて、

誰に指をさゝれたこともなかつたんですからね。その爲め、すつかり、好いお客

もなくなつたり何かして、それから苦勞をしたんですよ。それに、元、女中をし
たもので、今では裏切つて、すぐ近くに同じ待合を出してゐるものなどがあつ
て、私も考へて、いつそかういふ稼業はやめやう。と、かう思つて、それで大森
に球突を始めてゐるんですけれども……」などと話した。お八重もそれからそれへ
と話した。その話は、お八重はかねてBから聞いて知つてゐたが、Bが山口から
追かけて来た女を本場所前の旅籠屋に圍つて置いた時の話をした時には、女將の
眼には涙がたまつた。「何うして来ないんだらう。部屋にもゐないしと思つてゐた
が、少しあやしいと思ふことがあるので、それから新聞の秘密部に頼んでこつそ
り調べて貰うと、ちやんとその女がそこにあるて、關取は朝に晩にそこに行つて
るツて言ふぢやありませんか。でも、まさか、宅に使つてゐるものゝ手前もある
から、自分で出かけて行くわけにも行かず、何んなに苦勞したか知れやしません
よ。それに、その女を國へ返すんだつて、その旅費は皆な私が出したんですから

ね——」

かう話して来た時、廊下に重い足音がして、やがてBがその大きな肥った體と
いくらが笑を含んだ顔とを其處にあらはした。しかし、全體に意氣銷沈して、い
やに悄氣けてゐるのが誰の眼にも映つて見えた。

「あ、關取！」

かうお八重が言つた。

ぢろりと女將は其方の方を見たが、つゞいてお八重とBとの眼に注意した。女
將は別に何も言はなかつた。Bはお八重の傍にも座らず、女將の傍にも座らずに、
そのまゝ向ふの方へ自分で座蒲團を持つて行つて坐つた。

「何うしたの？大變待ちましたよ」

「うむ——」

120 Bはかう言つたきりだつた。

「お上さんが忙しい中で折角来てゐて下さるのに——」

「やめにしやうかと思つた……」

「何を？」

「來るのを」

「何うして……」

Bは黙つてゐた。そこへ女中は膳を運んで來た。Bは女中に酌をして貰つて、
ぐつと一杯呷つた。Bは既に何處かで一杯やつて來たらしかつた。

女將は少し酔つてゐるが、お八重とBとの態度から眼を離さなかつた。お八重
は又お八重で、女將とBの態度に細かい注意を拂ふことを忘れなかつた。

暫くしてから、「今日ね、八重ちゃんから電話がかゝつてね。それでさつき部屋
に電話をかけたんだが、私の腹では、兎に角、お前さんとはもう綺麗なんだから、
始めは、斷らうかと思つたんですよ。此處に來るまでもさう思つてゐたんですよ。

處が、八重ちゃんの話を書き見て見ると、いろいろ女同志でわかるところもあるんでね。お前さん。」かう言つて、「六百枚づゝ引受ければ好いの？」

「……………」

「黙つてゐちやわからないわね—

「何うでも好いんだ……………」

女達は呆れたやうにして、Bの方を見たが、暫くして、女將は、

「何うでも好いッて、しなくつても好いッて言ふの？」すぐ言葉をついで、「だつて、これほど八重ちゃんなんか心配して呉れてゐるんぢやないか。お前さんの名譽やら行末やらを思つて……………」

Bは矢張黙つてゐた。

122 Bはお八重の情を忘れ兼ねた。切れた上での最後の情などはかけて貰ひたくなかつた。そんなものは何うでも好かつた。勿論、自分の方にも、かうなつて行く

ひげ目はある。自分もわるかつたに相違ない。しかしそのわるかつたのにも自分だけには理由がある。昨日、お八重のゐる土地にわざと出かけて行つたのも、今日考へ考へ、電話の催促を受けて出て来たのも、引退の話なぞよりも、實はお八重の情にひかれて来たのであつた。萬一を期して来たのであつた。

「何うするのさ」

「お上さんだッつて心から貴方のためを思つてかうして来てゐるんぢやありませんか」

かう兩方から女達は迫つた。

「ぢや、好いやうにして呉れ！」

「男ッて、一體、さういふもんかね」かう言つた女將は、「お前さん、あれほど私と言つて置いたのに、この八重ちゃんのやうな若い妓に私にしたやうなことをしちや駄目ですよッてあれほど言つて置いたのに、お前さん、矢張八重ちゃんを酷

めたんだってね。何うしてお前さん、さうなの？」

「……………」

「今も言つてゐただけだね、折角、かうして私達が心配してゐただから、素直に受たけら好いちやありませんか。そして、引退をして、お前さんは、何うするの？ 國に歸るの？」

「外國へでも何處へでも行く！」

「東京にゐる様には行かないの？」

「……………」

「マア、兎に角、五月の引退を立派にして下さいよ」

かう傍からお八重は言つた。お八重は胸にこみ上げて来る涙を辛うじて押へるやうにした。

一四

Bは大抵は黙つて、ひとりで盃を口に當てゝゐた。彼方此方の室では、三味線が湧くやうにきこえて、客の酔つて女に戯れる氣勢が手に取るやうに聞えた。

女達は引退の相撲の話を種々にしてゐた。かれがそれをするには、TとAとにわたりをつけて一緒にやつて貰ふことにしなければならぬといふことを話した時には、女達は異口同音に言つた。「ぢや、Tに行つて話しして來たら好いでせう」ところが、Tは實はBの最も仲の好くない仲間の一人であつた。

「ぢや、別に、一日借切つてするツていふ譯には行かないんですか」
かうお八重は訊いた。

「それは難かしい。引退は一場所で一日といふことにきめてあるから……………」
「Tはもう願書を出したんですか」

「うむ……」

「なら、行つて入らつしやい。平生、仲がわるくつたつて、かういふ時ですもの、いやだつて言ひやしないでせう。Dの御大に話したつて、先でいやだつて言はれることぢやないぢやありませんか、ねえ、お上さん」

「さうともさ——」

「是非、行つて、さうなさいよ。」

Bは黙つて考へるやうな顔をした。兎に角その話は女達に任せることにして、それからいろいろな話が出た。それは多くはBの浮氣に關する話で、KのMといふ藝者のことがお八重の口から出ると、大連に行つてゐた女の話や女將はした。「私は、巡業中、何かにつけて便利だらうと思つて、私の家によく出入つた女の許に附手紙をしてやると、いつか、その女が二場所も三場所も跡を追かけて行つてゐるんですからね。」

「さうですか、そんなことがあつたんですか。ちつとも知りませんでした。今、その女は何うしました」

「東京のKにゐるんですよ。今でも、關取屹度逢つてますよ」

「さう……」

お八重は驚いたやうな顔をして、Bの方を見た。Bは矢張黙つてゐた。

女達のさうした話は長く長く續いた。Bに取つては、さういふことは皆な過ぎ去つた歡樂の跡だ。又、別に深く氣にも留めてゐないやうな出来事だ。しかし、女達には、今まで知られずに残つてゐたことが、兩方から交叉するやうにわかつて來るので、その度毎に二人は驚くやうにしてBの方を見た。普通ならば、笑つて戲談半分に、酒興にもなるやうな話であり位置でもあるけれども、女達もBも遂に遂に笑つて話す氣分にはならなかつた。

「まア、ねえ、何うして男ツてそんなもんですかね」

をりをりお八重はかう口を挿んだ。女將は女將で、「それは、八重ちゃん、私は此人のためには、何んなに盡したか知れないんですよ。着物が無いから、拵へてやると、二日と着てゐないし、小遣だつて、不自由だと思つて入れて置いてやると、一日も持たないんですから……。一夜、寝ると、又もとのどてらになつて了ふんですからね」かういふ話は盡きずに盡きずに出た。そしてかなり酔つた女將は、「かうまでしてやつても女の心が男にはわからないんですかねえ」と言つた。女將は種々のことを思ひ出すと、堪らなくなつて來ると言ふやうに、溢れ出す涙を襦袢の袖で拭いた。「だから、私は常々言つてゐたんですよ。餘りすほらにしてゐると、今日のやうなことがあるといけなからつて……。それやね、關取だつて、可哀相ですよ。今になつて、かういふハメになつて、それはいろく都合はあるでせうけれど、八重ちゃんとも切れなかりやなくなると、養老金はいくらかも取れないし、これから外國へでも行かうと言ふんだから……。金だねえ、

矢張、世の中は。今度のことだつて、關取が淡路で相撲が當つて、千と千五百と持つて來さへすれば、何のことはなかつたのだからね。……。金さへあればねえ、折角、かう二人で思ひ合つてゐるんだから、私でも出して上げたい位だけど……。」「かう言つて涙を流した。

お八重も胸の迫つて來るのを覺えた。かの女もそつと襦袢の袖で涙を拭いた。女將の言葉が難有いやうでもあり、又その奥に深いある意味を包んでゐるやうにも思はれた。酔つてから女將は何も彼も其處に打ちまけるやうにして言つた。その言葉の中には、一年半の間の孤獨の苦痛も、言ふに言はれない悔恨も、身も切れるやうな嫉妬も何も彼も難つてゐた。お八重に對する、乃至Bに對する同情の中にも、愛したのから愛せられない苦痛が名残なく包まれてゐるのであつた。

Bはかうした涙に、酒も酔を成さないといふ風にして立上つたが、
「Kがゐる筈だな」

「るますよ、向ふに……」

涙ながらにお八重は言つた。その間にも、女將は、人目の耻しさも、世間も何も彼も忘れたといふやうにして泣いた。

「もう、已は歸る」

Bの立つて行かうとするのを、「まア、お待ちなさい。一緒に歸るから」と言つてお八重はとめた。夜はもう十一時を過ぎてゐた。

「ぢや、Tに行つて下さいね」

お八重は寄り縋るやうに、頼むやうにして言つた。

ふと頭を上げた女將は、「これで、もう歸るのかえ」

すぐ言葉をついで、「なら、これから、私の家まで来てお呉れな……。ね、一緒に。まだ話し足りないから。ねえ、八重ちゃん、好いだらう。關取も行くね」

「行つたつて、しようがねえ」かうは言つたが、Bは此まゝお八重に別れてしま

ひたくなかつた。お八重も此まゝBに別れなくなかつた。女將にしても、このまゝ元の孤獨の境遇に歸つて、さびしく自分の家に寝たくはなかつた。

「ね、行つても好いね、八重ちゃん」女將はかう言つて、女中を呼んで、勘定をして貰つて、それから自動車を一臺頼んだ。Kが來たり何かしたりしてゐる中に、早くも自動車は來た。

一五

お八重はBと女將とを何うかして並べて腰掛けさせやうと骨を折つたが、女將はそれは何うしても承知せず、却つてお八重とBとが並べて其處に腰掛けさせられた。女將はKと一緒に腰を掛けた。

ボ、ボ——自動車は勢よく闇の中を走つた。夜は更けて、街には灯の影が少く

なつたが、それでも廣告燈は青く赤くぐるぐる廻轉してゐた。お八重は隣に座つたBの體のほの暖さを總身に感じた。

女將の昂奮した顔が青白く暗い闇の中に見えた。

車の中では、誰も口を開くものはなかつた。沈黙があたりを領した。Kだけ時窓の外の闇を覗いて見るやうにした。

「もう大川端だな」

かう突然Kは言つた。川はほの白く溶々として闇に流れてゐた。

H町のT屋はそこから少し右に入つた處であつた。やがて二階建の家の格子戸の前に丸い軒燈のついてゐるのが見えた。

「其處だよ」

かう女將は言つた。

自動車は凄しい音を立て、留つた。

色の白い肥つた女中が一番先に出て來た。女將は、「さア八重ちゃん……」かう言つて其處に立つてゐてお八重を誘つた。BもKもつゞいて上つた。二人の大鬘は鴨居につくやうに見えた。

「奥は開いてゐるね」

「え」

で、女中はこのめづらしい客達を奥の六疊に伴れて行つた。

お八重はその前にも一度此處に來たことがあつたが、その時は二階に通されたので、かういふ奥の間があるのを知らなかつた。お八重は木口の選ばれた瀟洒なつくりをした家を其處に発見した。女將のゐる帳場は、そこと廊下を一つ隔ててゐるばかりであつた。

女將はKに、「お前さん、あの妓を呼ぶのかえ？」などと言つて笑つた。

茶、菓子、それから酒が出て、大きな皿に盛つた鮎などが取寄せられた。「これ

は、關取が好きだから」別に小皿に長崎の泥海丹が少しばかり出された。

お八重は不思議な気がした。今度は自分がすつかり敵の中に入つて来たやうに思はれた。窓から、廊下から、床の間の幅物から、花瓶に生けた花から、すべてそこに女將とBとの情事が絡み着いて残つてゐるのをお八重は感じた。こゝに、帳場に近いこの奥の間には、いろなく、多い朝夕の追憶が今でも漂つて流れてゐるに相違なかつた。

「關取、寒さうね」

女將はかう言つて、自分のを直したらしい縮緬のどてらをBの後からかけてやつた。

「まだ、あいつを聘んでんのかえ」Kの女の來た時には、Bはかう笑ひながら言つた。Kはにやにやした。「もう、遅いから、いつまでもお京に世話をやかせず、早く寐て了ふ方が好いよ」かう女將に言はれて、Kは別の室の方へ行つた。

またその話が續いた。それはいくら言つても言つても盡きない話であつた。此處に來てから女將の態度が變つたと同時に、その話すことも變つて行つた。女將は主としてBの世話をした話をした。

矢張女將とお八重とが話して、Bは大抵黙つてゐた。Bの浮氣をした女將の話をして、「さうさね、いよく引退をやることになつたら、お神樂にも二十枚や三十枚は押つけてやらうね。何うせ、あいつのことだから、精々十枚も出來はしまいかれどね」と言つて時には、女將もお八重も笑つた。と、Bは「そんなにわる口を言ふもんじゃないやねえ。人のことをわる口を言ふのは自分のわる口を言つてゐるやうなものだ」と言つた。

「矢張、くやしいんだね」

かう言つて女將は笑つた。

しかし此處でも笑ふやうな氣分は何うしても漂つて來なかつた。三人はいつと

なく互に繋がれた羈伴のやうなものに引張れて、佷しい辛い心になつた。女中が銚子を持つて行つた時には、Bを中央に、左右に女將とお八重とが座つて、互に蒼白い疲れた昂奮した顔を見せて、深夜の静かなしんとした空氣の中に三人はゐた。ヒステリックな痾の立つたやうな顔を女將がしてゐるのを女中は見た。

お八重は、さつきから厠に行きたいと思つてゐた。しかし女將とBとを座らせて置いては、あとで何んな話をするかも知れないやうな氣がしたので、つとめてこらへて坐つてゐた。けれど、遂にはこらへ切れなくなつて、立つて厠の方へと行つた。

お八重は體の赫とするのを覺えた。ふと何か話してゐる聲がした。お八重は耳を聳てた。笑ふ聲がつゞいてした。

136 用を濟して、そつと戸を明けて、縁側に出て、手を洗ふ振をして、また耳を聳てた。此度は話聲も何もきこえて來なかつた。お八重はわざと平氣な風を粧つて

その一間へと入つて行つた。女將にもBにも別に變つた處も見えなかつた。またさうした話が續いた。

Bは突然、

「俺ア、歸る！」

「歸るツて、お前さん」

女將は立つた。お八重もつゞいて立つた。

「歸るツて、お前さん、何處へ歸るのさ？」

「何處でも好いや——」

「だツて、お前さん、何時だと思つて？もう一時すぎたよ。一時がもうぢき鳴るんだよ。何處へだツて歸れやしない。」

「大丈夫だよ」

「部屋だツて、もう歸れやしない」

かうお八重もとめた。

その前に、お八重も家のことを思ひ出して、「兎に角、私、歸つて出直して来ますから」と言つた。それは一時頃であつた。その時は女將は達つて留めた。「お前さんを歸して、關取を此處に留めて置くわけには行かないから」と言つた。で、仕方がないので、お八重はその心を翻した。それなのに、今度はBが歸ると言ふのであつた。

「そんなに歸りたければ、皆なしてお歸んなさい」かう女將は言つて、此方の方の室へと來た。

仕方がないので、それでは今夜は三人して此處に寐やうと言ふことになつた。それまでにするにも、お八重は何の彼のと言つてBをなだめた。

女中は床を二つ敷いた。一つには女將とお八重、一つにはBが寐た。

床に入つてからも、女達の話は容易に盡きなかつた。そしてその話は皆なBの

行爲に關してであつた。女達は終夜Bの輾轉反側するのを聞いた。をり／＼溜息をつく氣勢もした。

曉近く三人は疲れて眠つた。

一六

「もう、引退の話は斷る！」

かう翌朝、三人が同じやうにその一間に座つた時、Bは言つた。

「何うして？」

女達はBの方を見た。

「でも、俺にも考へがあるから……。俺ア、昨夜一晚考へた。俺は、これから、

俺の勝手にする」

グツと来たといふ風であつた。女將は黙つて、火箸を赤い火の中に入れてたが、急に「お前さん、これほど言つても、女の心持がわからないのかえ」かう言つて、その赤く焼けた火箸で、自分の咽喉を突かうとした。Bとお八重とは、慌て、それに縋り著いた。

Bの掌には赤く火箸の跡がついた。お八重は人差指を焼傷した。女將の顔には疳が立つた。

「まア、お上さん……」

「だつて、餘りぢやないかね。女がこれほど心配してやつてゐるのに、それがちつともわからないんぢやないか！」

Bは黙つて手を措いてゐた。

「そんなことを言はずに、關取……お上さんもこれほど思つてゐて呉れるんだから……」

「いや、俺にも考へがある。俺は一夜中寢ずに考へた」

「ぢや、Iに相談にも行かないんですか」

「もう、俺は行かん」

「何うして、そんなことを言ふの？ 昨夜まではその積りでゐたんぢやないの？」

Bは何うしても引退の世話にはならないと言ふのであつた。女將の眼からは涙が流れた。

「何うして、さう、お頭をまけたのさ。私達がいんな柵下しをしたことが氣に觸つたの！」

「構はんでおきよ、八重ちゃん。これほど言つても、女の情なんぞで言ふものかわからないんだから——」拭いても拭いても、女將の眼から涙が溢れた。

お八重にはその女將の涙や、昂奮が自分に對して行はれてゐるやうにも、又はその孤獨の辛さを男に訴へてゐるやうにも思はれた。お八重は何も彼も自分を中

心にして行はれてゐるやうなを感じた。お八重も泣きたくなつた。朝飯を食べてと言ふのもきかずに、又は女將が昨夜氣をつけて財布の中に金を十圓ほど入れて置いて置いたのを其處に返して、Bは外套を着て、サツサと歸つて行く支度をした。

「何うしても歸るの？」

「歸る」

「もう一度考へ直して下さいよ」

「いや、難有う。……好意はわかつた。俺もこれから考へたことがあるんだから」

「そんなことを言はずにさ……」

「いや、それは斷る」

何と言つても言ふことをきかずに、Bはサツサと出て行つた。

その後姿を見送つたお八重は、何とも言はれない男に對する同情と戀ごころと

の一緒になつて固つて簇つて來るのを覺えた。

それから一時間ほどして、明るい河岸を車に揺られながら歸つて行くお八重の身には、父母も同胞も旦那も何もなかつた。閘門を切落した水が凄しく漲り落ちて來るやうに又はそれを捨てゝは分自の生命の滅びて行くかのやうに、その胸は唯々男戀ひしさの情に燃えた。

お八重はこれからある處に行つて時を移さず男に逢はうと決心した。

河には日が麗かに照つて、白い帆や船や汽船が織るやうに混雑と往來した。橋の上には電車の通るのが見えた。

大正六年三月廿七日印刷
大正六年三月三十日發行

供體情話集第三編
お八重
(實價金四拾錢)

著者 田山綠彌

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田利彦

東京市京橋區弓町二十五番地

印刷者 高橋郁

東京市京橋區弓町二十五番地

印刷所 三協印刷株式會社

東京市日本橋區通四丁目角

發行所 春陽堂

振替東京一六一七
電話本局五一番

著作者檢印



■ 集作傑の家作名 ■

櫻痴著	紅葉著	風葉著	鏡花著	露伴著	綠雨著
櫻痴集	紅葉集	風葉集	鏡花集	露伴集	綠雨集
下上卷	自一卷至四卷	下上卷	自一卷至四卷	下上卷	全一册
各一圓卅錢 送料各八錢	各一圓卅錢 送料各八錢	各一圓卅錢 送料各八錢	各一圓卅錢 送料各八錢	各一圓卅錢 送料各八錢	價金一圓 送料八錢

東京日本橋通 春陽堂 振替一六一七

□ 著氏郎太林森外鷗 □

齋藤松洲氏裝 永原止水氏畫

■ 美奈和集

▼ 縮刷

□ 新型特製美本
□ 價一圓五十錢
□ 送料八錢

文學に多少の趣味を有する人で水沫集の名を知らない人ばあるまい。我が文壇の人にして水沫集より異常の興味と幾多の啓蒙とを受けたい人ばあるまい。實に本集は文壇唯一の寶典である。收むる處『舞臺』『うたかたの記』『埋木』『折薔薇』等二十篇九百餘頁、鷗外博士の傑作及び諸外國の代表的作家の傑作のみ。何れも優雅なる國文と雄渾なる漢文と精巧なる歐文脈とを融合調和して新文運を開拓せる名作にして藝術の精髓、異國の精華收めて茲にある。

永原止水氏裝幀

■ 即興詩人

▼ 縮刷

□ 新型極美本
□ 定價金一圓
□ 送料八錢

原書は丁抹人アンデルセンが筆に係り、譯者其完成に大約九星霜を費す。簡素實實なる國語と雄渾奇勁なる漢文とを調和し、屈曲自在なる雅言と放膽楚麗なる俚辭とを融合し、茲に些かの罅裂をも見出し能はざる藝術品を形成せり。即興詩人の行動こそまことに眞そのもの美そのものにして、局面の轉化は讀者の端睨を許さず。其言は岩間の清水の如く玲瓏人の肺腑を衝く。實に我文壇不滅の典據といふも、尙辭の足らざるを憾む。

■ 島崎藤村氏作 ■

藤村文集

和田英作氏装

縮本携帯至便

常に新酒の如く世に迎えられるものは藤村氏の詩文也。本書は『藤村詩集』と同時代の散文集にして詩によつて表白し得ざる著者若き日の自由奔放なる感情思想の結晶なり。されば本書を耽讀する者は『藤村詩集』を愛誦せざるべからざると同時に、詩集を愛吟する人々は又本書を繙かざるべからず。新版成るに際し讀者の便を思ひ、特に『藤村詩集』と同形を選ぶ、之れ眞に好個の姉妹篇。

菊半形三頁十箱入
價六十五錢・送料六錢

藤村詩集

價八十錢
送料八錢

わが藤村氏の藝術の根柢は「詩」である。氏の詩を知らずして氏の藝術を談ずる事は、氏の小説を味ふこととは出来ぬ。氏の詩集の賣行が日毎頻繁になり行く事實はよく此詩集の價値の不朽を立證してゐる。

幸田露伴博士作

心の出廬

金八十錢
送料八錢

理想派の大小説家露伴氏は、我日本に一つの誇るべき國詩なきを嘆じ、自ら進んで筆を韻文に染め本書をなす。その文字の幽麗なるその意の深遠なる實に一大國民詩也。

■ 三重吉全集 ■

(6) 霧の雨 四短種篇	(5) 千鳥 八短種篇	(4) 女 五短種篇	(3) 小猫 五短種篇	(2) 赤い鳥 四短種篇	(1) 瓦 六短種篇	全創作七十餘編を收む。各頁殆ど完膚なき迄に改竄したる腐心慘憺たる新藝術の集成である。装幀善美眞に出版界を驚愕せしめし列冊	□ 津田青楓氏装書 高野正哉氏
(13) 小鳥の巢 下卷	(12) 小鳥の巢 上卷	(11) 八の馬鹿 十短種篇	(10) 櫛 五短種篇	(9) 桑の實 長篇	(8) 金魚 十短九種篇		

各册十五錢 春陽堂 郵送料六錢

讀者諸賢の便を思ひ合本縮刷して刊行す携帶至便而も賣價は大本の半額以上

夏目漱石氏作

合本 鶉籠、虞美人草

價一圓五十錢 送料金八錢

合本 三四郎、それから、門

價一圓五十錢 送料金八錢

合本 彼岸過迄、四篇

價一圓五十錢 送料金八錢

草 枕 送價料四十四錢
 滿韓處々 送價料卅四錢
 夢十夜 送價料卅四錢

思ひ出など 送價料四十四錢
 坊ちやん 送價料卅四錢
 切抜帖より 送價料七十六錢

田山花袋氏長篇新作

一兵卒の銃殺

四六判洋裝 定價金一圓 送料八錢

現文壇の巨擘花袋氏が、想を構ふること數年筆を執ること約一年にして完成し初めて世に問ふ一大長篇である。一個の兵卒として遂に銃殺の刑に處せらるゝ一青年!!! そもそも彼は如何なる生ひ立ちを有し、如何なる心的苦悶を経過し、如何なる罪を犯したのであるか。現代生活を圍繞するもろくの社會問題は此の青年の一生を中心として極て大膽に深刻に藝術化せられて居る。宿命の破綻か性格の悲劇乎。兎に角現代の生める慘たる生活悲劇が嚴として此處に横はつて居る大正文壇の傑作として吾等は江湖に此一書を捧げる光榮を有す。

恐るべき時代の産物

合歡の花

價九十五錢 送料八錢

文壇多年の權輿たる著者は、最近新しき感激に動かされ數篇の傑作をなせり呪はれたる愛の二家族。戀の初老、旅に迷ふ心中のかたはれ。藝妓屋の陰日向。行き方なき遁世の僧正と其戀の殘像を慕ふ凄艶なる女。寒村の男女教師の甘き契。何れも人生に對する『靈的冒險』の試みにして、數奇なる運命と涙ぐましき人生とを描出せる選集なり。

尾崎紅葉氏作

木版

- 関 貫 一
- 堀 澤 宮
- 荒 尾 龍 介
- 赤 松 滿 枝
- 弘 光 氏 筆
- 蕪 園 女 史 筆
- 英 朋 氏 筆
- 清 方 氏 筆
- 富 山 唯 繼
- 伊 山 元 輔
- 越 前 者 愛 子
- 蒲 田 鐵 彌
- 古 洞 氏 筆
- 洗 瀝 氏 筆
- 五 葉 氏 筆
- 春 仙 氏 筆

金色夜叉

縮合本

松洲氏裝
價一圓卅錢
送料八錢

明治文壇の偉傑紅葉氏が其最後の七年を挺し、死迫るに至つて、尙ほ筆を擱かざりしもの。實に故紅葉氏が血を以て購ひ得たる雄篇にして、明治文學史が血を以て特記すべき大作なり。……新裝善美……

……若き血に狂ふものよ、汝の足下は斷崖なり。……

縮刷

青

春

小風葉氏作

新活字八百頁
一圓五十錢
送料八錢

抱月氏曰く『當代の最も複雑なる思想の階級を代表的に描かんとした……』と、誠に此評言の示す如く、本作一度世に出づるや忽知として人氣を恣まにし、新時代人に好個の題目を提供して己ます。多情多恨なる青年欽哉と情に脆き繁子の名は彼等が犯せる罪と共に、永久に青春の血の高鳴りを記念すべきものなり。時代の英雄か時代の犠牲者か若くは久遠の罪人か。これ等すべての疑問は、時代の赴く處を知る者のみ獨り答へ得るものなり。讀者よ。深刻なる人生問題に觸れよ。

小山内薫氏作

大川端

縮刷極美本
紙四頁
送料六錢

▽新しき都會小説なり△

洛陽の紙價を高からしめし著者が唯一多情多恨の長篇作正雄と云ふ青年の初戀ごころに映じたる君太郎、小さと、せつ子の三美妓を中心として東京の色町の優しい哀樂、頓てすべての女に別れて獨り身を嚙むやうな哀愁に悶える男の心に、何人か紅涙の潜たるを禁じ得やう、輕妙なる才筆を包む鹿の子切れの装幀もよく此物語の情調を語つて居る

▽新しき蘇小秘史なり△

高山樗牛氏作

瀧口入道

縮刷
鯨崎英朋氏裝
紙四頁
天金美本帙入

戀に望みを失ひて、世を捨てし身の世に捨てられず、主家の運命を影に負ひて、二十六年を浮沈の波に漂はせし齋藤瀧口時頼が多恨なる生涯を描き、平家一門の世に類ひなき末路を偲ばしむ。天才故高山樗牛博士が若き悲しみの全幅を披瀝せる光輝ある出世作である。

定價四十五錢
送料六錢

□ 長田幹彦氏作 □

傑作 選集 ■ 紅夢集

(刷縮)

□□木版刷表紙美本
□定價九十五錢
□郵送料金八錢

本書は作者が會心の雄作自選集也。一躍文名を驅せたる處女作『零落』を初め傑作八篇を收む。其描く處、出水時の悲劇、旅役者の一群、北海の果に身を埋むる賣女、浮世双紙に見る如き蕩兒、京坂の柳暗花明、何れも數奇なる人生の變轉を描破せるものにして、潜々落花の哀れを思はしめ、喃喃紅夢の甘きに醉はしむ。歡樂と流浪、愛着と廢殘の香氣全卷に溢る。眞に人情小説の白眉。

傑作 選集 ■ 白絃集

(刷縮)

□□木版表紙五五〇頁
□定價九十五錢
□郵送料八錢

收むる處「扇昇の話」「師匠の娘」「尼僧」「お鶴」「澤」等の數篇。その描くや北海を渡り歩く若き旅役者が賣女に捨てられ陋巷に窮死する哀話。下町に育つた師匠の娘の樂慾。妙齡の尼僧と美貌の僧侶との戀物語。白痴の下婢の男ゆゑの盜み。幻怪なる凍湖の不思議な自然と人生。浪華にさまよふ女義太夫の心を嘯むが如き哀愁の戀。雪の國を駈落する娘と旅役者。いづれも濃かなる情海の幾波瀾。魂を咬る悲戀の極致を描き、文壇一方の特色ある代表的作品也。

■ 長田幹彦氏作 ■

津田青楓氏裝釘

■ 情炎

□□縮刷美本
□價六十錢
□送料六錢

子までなした相愛の仲をも破る義理の假面、愛なき亡靈の如き結婚、清純な處女心を濁す疑惑、良人の秘密に魂を裂かれ、毒を仰ぐ若き妻の慘劇。これ悉く人の世に狂ふ情火の一閃。わが幹彦氏材を栗上流家庭の秘密事にとり、豊醇瑰麗なる筆を揮つて凄艶きはみなき此物語を成す。眞に之れ至情至愛の事實小説。
情火一閃若き男女を惱殺す

■ 舞扇

價九十錢
送料八錢

西京は女の都也。幹彦氏祇園樂土の舞妓を材とし本書を編む。行文豊麗舞妓の口紅よりも紅く眞に戀の國の哀歌。

■ 雪の夜話

八十五錢
送料八錢

凍雪の國々を漂泊せる間の藝術的收穫の全部。幹彦氏の榮譽なる位地は本書により永遠なり。雪岱氏の裝幀善美。

■ つゆ草

價九十錢
送料八錢

優しい俊子が愛人を抱いて北海の雪原に惨死するを描く。濃霧に響く二發の銃聲は永遠に刻まれた不可解の謎か。

河竹繁俊氏編

默阿彌物語

縮刷四百五十頁
定價八十五錢
送料金八錢

滿部の人氣を獨占せる日本の一大狂言作者河竹默阿彌翁の數多き戯曲中より「村井長庵」「三人吉三」等の十傑作を選び、新に物語風に書き改めたるもの本書也。何れも華かな舞臺を搖蕩する傳法肌の男女、戀の立引、めぐる因果の恐しさ、善惡とりくみの好場面を髣髴せしめ、讀者をして遺憾なく江戸情趣を玩味せしむ。正に之れ讀むべき芝居物語にして、又默阿彌物の研究資料として好適なり。

河竹默阿彌

珍貴圖挿入
價一冊六十錢
送料八錢

大近松と並べて我國戯曲家の双壁と目される、河竹默阿彌を傳し、或は論じたるもの、擧げて數ふべからずと雖、彼の人物と一生と時代と事業とを論じて周到を盡せるものは獨本書あるのみ。蓋、本書は翁が二世の嗣子にして新進戯曲家たる繁俊氏が、無限の材料の堆積裏に没頭して、遂に大成せられたる紀念的著述たればなり。翁が家系、生ひ立ち、發心等の機微なる消息に筆を起し、劇作者としての翁が一生を巨細に亘りて傳す。而も翁が一生の背景をなす江戸末期及び明治初年の文物亦遺憾なく本書に論じ盡されたり。翁が全傳として、全作梗概としてまた歌舞伎發達史として、江戸世相史として實に空前絶後の一大偉著たるを失はず。

戲曲選集

劇壇の沈滯其の極に及んで新國民劇復興の聲今や漸く天下に喧しからんとす。茲に新古名戯曲を撰して本叢書を刊行す。劇壇新機運の招來爲めに鮮やかなるを見るべし。

舞臺寫真挿入
各冊金五十五錢
送料各六錢

沓手鳥孤城落月

坪内逍遙氏作

時代の要求により全部改作出版せらる。哀れ七日月の落つると共に、其武運永へに地に隕ちたる大阪城を主題とし、艶美なる淀君が狂亂、秀頼が薄運、家康が仁慈、且元が血涙等心肝虹の如き諸相を點配す。博士が魅力ある境遇悲劇の新様式の試は、必ずや好劇家の視野を新たにすべきを信す。

俠客春雨傘

福地櫻痴氏作

本篇は櫻痴翁が賑々しき新歌舞伎劇也。誰だと思ふ一本立の男達藏前の曉雨が仁俠、巷を荒す鐵心齋、釣鐘庄兵衛が陰惡の幾葛藤は、紅花匂ふ色里を背景として、善惡表裏の好場面を描出す。各幕皆江戸情調の高度なる劇化にして好劇家必讀の名著。

脚金色夜叉

紅葉氏原作
屋葉氏補脚

脚日本橋

鏡花氏作

■ 名家傑作集 ■

錢六稅郵 □ 錢拾五册壹

(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
野の花	白露紅露	水彩畫家	照葉狂言	其面影	不言不語
田山花袋著	幸田露伴著	島崎藤村著	泉鏡花著	二葉亭著	尾崎紅葉著
……以下續刊……	「野の花」は主情的傑作「重右衛門の最後」は新藝術の第一聲。	深遠なる宗教的哲學的傾向を高揚す、正に代表的東洋藝術也。	最初の試みになれる記念的作品。印象の鮮、情感の新作を看よ。	可憐の少年と女狂言師との情愛を描ける清純なる浪漫的物語。	「不言不語」は美しき妻女の悲劇。「心の闇」は盲人の片戀物語。

……以下續刊……
春陽堂

□ 泉鏡花氏作 □

<p>（容内） □葛系白 □飾手 □砂道網鷺 □辰巳巷談 □南地心 □夜角漿</p>	<p>（容内） □湯島詣 □通夜物語 □婦系圖上卷 □婦系圖下卷</p>	<p>（容内） □不櫛知火 □印度更紗卷 □櫻霞降 □柏櫻奇譚 □銀短冊</p>
<p>遊里集 ▼▼ 送羽二重表紙 一圓五十錢 料八錢</p>	<p>鏡花選集 ▼▼ 送羽二重表紙 一圓五十錢 料八錢</p>	<p>由縁文庫 ▼▼ 送羽二重表紙 一圓五十錢 料八錢</p>

「由縁文庫」以下三集は、いづれも任俠を經とし、戀を緯とせる錦篇にして、實に江戸情調の結晶なり。戀に生き戀に死ぬる、歡樂の血涙を以て充されたる傑作の堆集なり。粹艶なる雪岱氏の装幀は、よく内容と相俟つて所謂縮刷本の俗惡を脱せるもの。

鏡花氏の作品の、我が文壇に於ける特種の位置に就ては、吾等の多く云ふを俟たざる處、實に後來の日本文學史を飾るべき雄にして珍なる藝術である。

■ 集話情艶俠 ■

錢四各料送・錢十四册各

江戸文學の中心的興味は、今や新江戸趣味復活の機運の鬱勃たるものある時、其先鋒の炬火をかざすべき本叢書の刊行せらるゝ素より偶然に非ざるなり。哀幽極まりなき情調の世界に生きんとする人、洗練せられたる生の悦樂に歡喜せんとする人、絶好伴侶たるべきものは本叢書なり。

(畫 裝)

鏑木清方氏
池田輝方氏
池田蕉園女史
鯨崎英朋氏

第一篇 □ 幻の繪馬

泉鏡花氏作

第二篇 □ 小 蕙

長田幹彦氏作

第三篇 □ お 八 重

田山花袋氏作

第四篇 □ 女 魔 術 師

岡本綺堂氏作

……毎月連続出版……

278
9/7

終

